

---

# 仮面ライダーアナザーディケイド・スピンオフ！！

矢部小路 X X

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーアナザーディケイド・スピンオフ！！

### 【Nコード】

N4178R

### 【作者名】

矢部小路XX

### 【あらすじ】

あのアナザーディケイドがスピンオフで登場！！究極空間 アルティメット・ディメンジョンくで、こなたが、かがみが、縦横無尽に大暴れ！…時々、作者の私も乱入！楽しい笑いの時間をどうぞ！  
！ このノベルはキャラ崩壊が激しく、原作の方がいい方は、早めに回れ右する事をお勧めします。

ボケ 1 まずは自己紹介から。(前書き)

OP「イント」OP「

こなた「さあ始まるぞますよー!」

みゆき「いくでガンス。」

つかさ「フンガー!」

かがみ「まともに始めなさいよ!」

こなた「何か、飽きちゃったね!」

かがみ「新しいパターンが必要かもね。」

XX「じゃ、これならどう?」

こなた「泣けるで!」

みゆき「私に、釣られてみます?」

つかさ「答えは聞いてない!」

かがみ「いくぜ、いくぜ、いくぜええええつ!!!」

こなた「…やっぱ、だめだ。いつものでいいや。」

XX「私の苦勞って、一体…。」

## ボケ 1 まずは自己紹介から。

XX「さて、まずはみんなの自己紹介から。」

仮面ライダーアナザーディケイド（青い瞳の破壊者）・サイド

シャイアン「私がシャイアン・ブルーローズ、仮面ライダーアナザーディケイドだ。よろしく。」

こなた「そして私が本編のもう一人の主人公、泉 こなただよ、よろしく。」

かがみ「私は柊 かがみ、仮面ライダークウガよ。みんな、よろしくね。」

つかさ「私は柊 つかさ、仮面ライダーアギトです。よろしくね。」

みゆき「私は高良 みゆき、仮面ライダー響鬼です。みなさん、よろしくお願います。」

みさお「私は日下部 みさお、仮面ライダーブレイドだぜ。よろしくなっ！」

あやの「峰岸 あやのです。仮面ライダー龍騎を務めています。みさちゃん同様、よろしくね。」

XX「さて、ここからゆーちゃん達の挨拶があるわけんだけど…。」

こなた「あー作者さんや、何か向こうが騒がしいんじゃないのう。」

XX「あ、本当だ。…ゆーちゃん達に何があつたんだ？」

ゆたか「きゃあああああつ!!」

ひより「う、腕ええええつ!!」 手直にある物を投げている。

???「ま、待て!物を投げつけるな!!何もしいって!!」

XX「あ、あいつか。…ゆーちゃん、その腕は味方だよ。」

ひより「ええつ、これが?!」

ゆたか「本当ですか?」

XX「うん、本当だよ。」

???「あーびっくりした。何事かと思っただぜ。」

らきライダー全「腕がしゃべったああああつ!!」「」

XX「心配しないで、体は見えないだけだから、特に害はないよ。」  
つかさ「どんだけ。」

かがみ「全くもう、おどかさないですよ。」

???「…ごめん。」

こなた「しかし、びっくりしたねえ。空飛ぶ腕なんて、どこかの口ポット物みたいだよ。」

???「わかっていても、口にはしないで。」

シャイアン「で、腕がここにある、と言うことは…。」

XX「そう、もう一人来るっていう訳だ。」

こなた「あの更新が不定期の…?」

XX「そう、あいつだ。…とその前に、ゆーちゃん達の紹介がまだだったね。」こなた

「…そうだった、忘れてた!!ゆーちゃん、もう自己紹介してもいいよ。」

ゆたか「皆さん初めまして、小早川ゆたかです。仮面ライダー電王

に変身して、みんなのために頑張っています。よろしくお願ひします。」

ひより「私の名は田村ひより、仮面ライダー555です。よろしくお願ひします。」

みなみ「…岩崎です。仮面ライダーカブトに変身します。…よろしく。」

パティ「パトリシア・マーティンです、仮面ライダーキバにチェンジしてファイトしてます。ヨロシクデース!!」

XX「さて、これで自己紹介は…。」

???「待ってええええっ!!!(泣)…先輩iiiiiiiっ!!」

らきライダー全「…何が来たああああっ!!」「」

こなた「しかも、555アクセルも超えた超音速で!!」

みなみ「…生身クロック・アップ、ですね。」

〈仮面ライダーデュエル・サイド〉

はやと「みなさん初めまして、海藤 はやとです。仮面ライダーデュエルに変身して、みんなのために戦っています。よろしく!!」  
勝舞ハンド「そして俺が切札 勝舞だ。よろしくな!!」

らきライダー全「…誰?」「」

はやと「えええええっ?!誰も知らないのおおおおっ!!」  
こなた「…だつて、更新が全くないからみんな忘れられてるし。」  
はやと「…orz」  
こなた「冗談だよ。そんなに落ち込まないで。」  
はやと「…ぐっすし。(泣)」  
ひより「大丈夫っす。私がついてるから。」  
はやと「…先輩いいいいっ!!!(大泣)」  
シャイアン「あー、一つ言っついていいかな?」  
はやと「?」

シャイアン「君と彼女、同じ年だから。」 はやと「16才、ひより16才。ちなみにデュエル本編では17才」

はやと「うそおおおっ!!」  
シャイアン「本当だ。」

はやと「うわああああんっ!!!(大泣)」  
かがみ「ちよつとシャイアンさん、何も泣かさなくても…!!」  
鷹の目で睨みつけている+RUオーラが充満  
シャイアン「…すまなかつた。」  
ゆたか「はやと君、ごめんなさい。でも、私達もはやと君の味方だから。」

みなみ「気を落とさないで。」  
はやと「あ、ありがとう。先輩のみなさん…。」 再び大泣

XX「もう自己紹介は、これで終わりかな?」  
みゆき「…あの、すみませんが。」

XX「?どうしたの?」

かがみ「もう一人、忘れてない?」

XX「…え?」

仮面ライダージョーカー「…ちょっと。(怒)」 作者の背後に立っている。

『ユニコーン・マキシマム・ドライブ!!』

仮面ライダージョーカー「ユニコーン・ライダー・パンチ!!」

ボグシャーーー!! 作者を殴り飛ばした

XX「ぐぼおおおっ!!」

こなた「…あーあ。」

かがみ「知らないっつと。」

つかさ「はうっつ、痛そう。」

みゆき「自業自得ですね。」

XX「…。」 返事がない。只の死体の様だ。

こなた「ま、作者さんは放って置いて。こちらにいるのが仮面ライダージョーカーこと平野 唯ちゃんだよ。」

唯「平野 唯です。みんな、よろしくね。」

シャイアン「ま、そう言う訳で。」

こなた「時々ゲストを招いてのスピノフ・ノベル、始まるよー！  
！」

らきライダー全「「「よろしくねー！！」「」

XX「よろしくね……。」「ガクッ。」

ボケ 1 まずは自己紹介から。(後書き)

こなた「あー、疲れたねえ。」

かがみ「全くね。」

XX「お疲れさん。」

こなた「出たな、シヨツカー!!!」

XX「誰がシヨツカーだ!!!」

かがみ「作者さん、次回はどうするの?」

XX「次回か…。今度電王とオーズの映画が上映されるから、それ絡みでやってみるか。」

こなた「電王か、またやるんだね。」

かがみ「しかも、あのキカイダー兄弟やイナズマンも参戦するって話よ。」

こなた「ズバツと参上、ズバツと解決!!!ズバツトも出るらしいし、いろんな意味で楽しい映画になりそうだよ。」

XX「次回は電王&オーズ映画上映直前記念で、いってみよー!!!」  
こなた・かがみ「おーっ!!!」

## ポケ 2 昭和ライダーになろう！（上級生編）（前書き）

シャイアン

「今回は、本編突入前に新キャラ2人を紹介しよう。」

シャツフル

「俺が、仮面ライダーディスラツシュことシャツフル・ガードナーだ。よろしくな！」

ガラハド

「そして私が、シャイアンの父で、ガラハドと申します。」

シャイアン

「以上のキャラで、よろしくお願いしたい。」

右 落次郎

「…あいつら、俺様を無視しよつて…！まあいい。俺様は、作者の『仮面ライダーディケイド〜仮面ノリダーの世界』から出張して来た右 落次郎と申す者。よろしくな！」

尚、今回から書き方を変更しました。前作と見比べて下さい。



## ボケ 2 昭和ライダーになろう！（上級生編）

こなた

「結局、作者さんは映画版電王を見に行けなくて、ガツカリしてたみたい。しかも、上映記念のネタもアイデアがなくて没になっちゃったんだって。」

かがみ

「確かに、ネタ切れはよくあるけど、今回はネタの方は大丈夫なの？」

こなた

「…うん、大丈夫みたい。何でも、シャイアンさんのお父さんと今回のために打ち合わせをしたって。」

かがみ

「ガラハドさんと？…何か、嫌な予感がするわね…。」

シャイアン

「と言うわけで、今回のテーマは、これだ。」 指をパチンと鳴らす。

ドカドカドカツ！ 真上からベルトが降ってくる

こなた

「な、何この大量のベルト?!」

かがみ

「しかも、全部昭和ライダーのじゃない!…ま、まさか!」  
つかさ

「本郷さん達から奪ってきたの?!」

みゆき

「どうも、そうではない様ですよ。何かこう、手作りの温かさを感じますが。」

みさお

「ひょっとして、あのおやっさんが手作りで…!」

あやの

「本当に?!」

シャイアン

「今回は、全員で昭和ライダーのベルトを使って、昭和ライダーに変身してもらおう。」

かがみ

「確かに面白そうだけど、このベルトは一体どうしたの?」

シャイアン

「何でも、父上が暇つぶしに作ったらしい。それを、作者が頼み込んで改良した物だそうだ。」

パラルル(前:らきライダー)全

「『ええええええっ!!』」

こなた

「こ、これをたった1人で…!」

かがみ

「ブルーローズ家、恐るべし…!」

シャイアン

「まずは、誰から行く?」

あやの

「じ、じゃあ私から…。」

こなた

「あやのさん、頑張って!」

あやの

「う、うん…。」

かがみ

「峰岸は、1号ライダーマンが反応なし、Xは変身できるけど威力はイマイチ。」

あやの

「アーマーゾーン…!…ううん、だめ。アマゾンには、ちょっと無理。」

「

こなた

「そりゃあ、あやのさんにアマゾンは似合わないよ。」

つかさ

「ストロンガーとスカイライダーも反応なし、と。」

シャイアン

「じゃあ、何なら合うんだろう?」

かがみ

「スーパー1は?」

あやの

「やってみるね。」

あやのスーパー1

「…出来ちゃった。」

かがみ

「ええっ!無理かと思ったのに、出来ちゃったの!?!」

あやのスーパー1

「うん、そうみたい。早速、これ試してみるね…。」 炎熱ハンド  
にチェンジ

ポウッ！ ストライク・ベント並の火球が発射

シャッフル（通りがかり）

「ぎゃああああっ！！」 大当たり！

あやの

「あっ、ごめんなさい！」

シャッフル

「何で火球が飛んできたし。」 アフロ

シャイアン

「こなた達が昭和ライダーに変身する企画をやっていてな。その関係上だ。」

シャッフル

「変身の企画で俺丸焼け?!」

あやの

「まあまあ。」

結局、ZX・ブラック・RXも反応はありませんでした。

みさお

「よし、次いくぜ!!」

あやの

「みさちゃん、頑張つて。」

みさお

「まかせとけて!!」

こなた

「みさきちは、やっぱり1号・2号がダメ。」

みさお

「ま、最初から当てにはしてないけどね。…変、身！V3！…！」

みさお

「あ…あるえ？」 変身失敗

あやの

「まあまあ、みさちゃん。落ち着いて。」

みさお

「くっそう、まだまだあっ…！」

かがみ

「結局、ライダーマン・Xは反応なし、ZX・ブラック・RXは反応するけどパワーは落ちる、と。」

みさお

「まだまだあっ…いくぜ！…アーマーゾーン…！」

みさおアマゾン

「やった、出来た！」

こなた

「ギター、野生J」「ちびすけ、ロイヤル・ストレート・スーパー大切断、受けてみる？」「…すいませんでしたあ！」

かがみ

「ブレイドと混ぜるな…！」

シャイアン

「次にストロンガーは、どうだ？」

みさお

「やってみるってウあ！いくぞ！…変、身！ストロンガー！！」

バリバリバリバリ、ピッキーン！

みさおストロンガー

「おお、出来た！…何か、感じがブレイドに似ているな、これ。」

かがみ

「そうね。カブトモチーフ、電撃ビリビリ…オンドウル語。」

あやの

「柊ちゃん、オンドウル語は関係ないわ！」

みさおストロンガー

「ひいらぎ〜。」 キンググラウザー、スタンバイOK

かがみ

「すいませんでしたあ！」

こなた

「じゃあ、エレクトロファイヤーをやってみて。同じ電気系だから、使えるはずだよ。」

みさお

「そうだな。よし、よく見ててよ！…エレクトロファイヤー！！」

バリバリバリバリッ！！

パラレル全

「「「きゃあああああっ!!」「」「」

シャイアン

「うおおおおっ!!」

シャツフル

「ぎゃあああああっ!!」

シャイアン

「一体、何があった…。」 髪が燃えている

シャツフル

「威力ありすぎじゃね?」 アフロモヒカン

こなた

「どうやら…。」

かがみ

「このエレクトロファイヤー…。」

つかさ

「全方位に…。」

みゆき

「放てる様ですね…。」

あやの

「すごいわ、みさちゃん…。」 パラレル全員すすが付いただけ。

こなたに至ってはしびれた程度

かがみ

「日下部は、ストロンガー自重ね。」

みさお

「…ごめん。」

シャツフル

「じゃ、ラストだ。スーパー1をやってみて。」

みさお

「おっし、やーってやるぜー!!」

こなた

「何か、嫌な予感が…。」

みさおスーパー1

「おお、感じは違うけど何か力が体の中に漲ってくうー!!」

かがみ

「確か、峰岸もスーパー1になれたんでしょ。何か羨ましいなあ…。」

「 遠い目

あやの

「柊ちゃんったら、もう…。」 顔が真っ赤

こなた

「あ、でも…。」

かがみ

「?」

こなた

「スーパー1って、5ハンドの中にエレキハンドがあったよね。」

かがみ

「え、っ！しまった、日下部ストップストップ!!」

みさおスーパー1

「うえ？」 エレキハンド発動

バリバリバリバリッ!! またしても全方位放射

全員

「「「「やっぱりいいいいっ!!」「」」」」

こなた

「…遅かった。」 アホ毛に火がついている

かがみ

「ま、まさか…。」 すすが付いた程度

つかさ

「全方位が…。」 上に同じ

みゆき

「まだ続いていたなんて…。」 眼鏡が蒸発した

あやの

「みさちゃん、すごすぎるね…。」 カチューシャに火がついている

みさおストロンガーの場合、電気技全てが全方位放射型。  
スーパー1の場合、エレキハンドも全方位放射型。しかも、威力は  
本家の5倍。

こなた

「次は、みゆきさんだね。」

つかさ

「ゆきちゃん、頑張つて。」

みゆき

「ええ、では行きます。」

かがみ

「みゆきは、1号Xにストロンガーとスカイライダー、スーパー1、ブラック、RXが反応なし。…みゆきにしては珍しいわね。」

みゆき

「こればかりは、仕方ありませんね。」

こなた

「で、残ったのがアマゾンとZXのみ…。」

かがみ

「いや、だからってみゆきに合うとは限らないわよ。無理はしない  
で。」

みゆき

「ですが、せつかくですので試してみますね。」

みゆきアマゾン

「出来ました。」

かがみ

「み、みゆき!?!」

つかさ

「すごい!」

こなた

「やっぱり、狙った通りだよ。みゆきさんは響鬼だから自然系は来  
ると思ったからねえ。」

かがみ

「しかしねえ、こなた。いくらみゆきでも大切断が似合うと思う?」  
こなた

「うーん。…そこまでは考えてなかったなあ。」

みゆき

「だぁーいせえーつ、だぁーん!!」 近くにあった丸太が真つ二つ

パレレル全

「うそおおおつ!!」

かがみ

「み、みゆき…。」

みさお

「丸太が、スパツと…。」

つかさ

「ゆきちゃん、すつごーい!!」

こなた

「うーん、凄まじいなあこの威力。」

あやの

「高良ちゃん、すごいね。(パチパチ 拍手)」

みゆきZX

「こちらも、無事に变身出来ました。」

かがみ

「こなた、本当に大丈夫なの？ZXなんかに变身して。」

こなた

「まあ元々ZXは忍者ライダーと呼ばれているし、忍者は日本の文化だから問題はないと思うよ。」

みゆきZX

「鍛えてますから!(シユツ)」

つかさ

「ゆきちゃん、かつこいい〜!」

シャイアン

「では、少し体を動かしてみて。」

みゆきZX

「はい、では…。」

ヒュンッ！！　　C U並に移動

かがみ

「え？…今、みゆきが高速移動しなかった？」

つかさ

「うん、かなり速かったけど、よく見えなかった…。」

こなた

「つかさは動体視力も鈍いからねえ。」　誰だって見えないよ

つかさ

(こなちゃんのくせに〜!!)

みゆきアマゾンの場合、大切断の威力は厚さ約20cmの鉄板をも真つ二つにする。

また、ZXの場合、C U並の移動速度を誇る。　鍛えているから

こなた

「さあ、いよいよつかさの番だね。」

つかさ

「うん、うまくいくかな。」

かがみ

「大丈夫よ、自分を信じて。」

あやの

「妹ちゃん、頑張つて。」

かがみ

(い、妹ちゃんって…。ま、いいか。)

こなた

「やっぱ鬼門なのかな、1号と2号の変身って。」

シヤイアン

「それはないと思うけどな。」

つかさ

「じゃ、次ね。…変、身！ブイスリヤー！！」 お約束

つかさV3

「やった、出来たよー！」

かがみ

「やったじゃない！」

みさお

「柊の妹も、やるじゃない。」

シヤイアン

「じゃ、V3バリアーをやってみて。」

つかさ

「うん。」 V3バリアー発生

バチバチッ！！

パラレル全

「『『え。』』」

バリバリバリバリッ！！ 何故かワ ドシ ット発射

つかさ

「ほ、ほえ〜！！」

右 落次郎（通りすがり）

「ぎゃあああああっ！！」 人工衛星になった

ちなみに、他は全て反応なしでした。

かがみ

「私の場合は、1号・V3・ライダーマン・X・アマゾン・ストロ  
ンガー・スカイライダー・ZX・ブラック・RXが反応なし。」

こなた

「うーん、となると2号が鉄板かな？」

かがみ

「まさか。…変、身！」

かがみ2号

「あ。出来た。」

こなた

「かがみ、やリーー！！」

みゆき

「かがみさん、おめでと〜っ！！ございますー！！」

つかさ

「お姉ちゃん、すごい!!」

みさお

「柊、やったね!」

あやの

「柊ちゃん、おめでとう!」

シャイアン

「ハアアアアツピバアアアアステエエエエイ!!」  
シャツフル

「どこぞかの社長か、お前は!!」

かがみスーパー1

「で、最後にこれが。」

こなた

「5ハンドのどれかを使ってみて。かがみなら、使いこなせるのが  
あるはずだよ。」

かがみスーパー1

「うーん、やっぱりこれかな?」 パワーハンド装備

ドヒュッ!!...ゴオオオオオン!! 丸太が木っ端微塵

こなた

「え、今のって、バコーン・プレッシュャー!」

つかさ

「どんだけ〜。」

みゆき

「...」 固まっている

みさお

「あやのお…。柊が、柊が…マンジュウコワイ。」  
あやの

「みさちゃん、よしよし、よしよし。」

かがみスーパー1の場合、パワーハンドがサゴーズ並の高パワーを誇り、ロケットパンチも発射可能。（威力は魂ボンバーの50分の1）

こなた

「さあラストは私だよ！」

つかさ

「こなちゃん、頑張つて！」

かがみ

「いきなりコケないでね。」

こなた

「かがみつてば、信用してよ！」

こなた

「な、何故なんだ。2号・V3・ライダーマン・X・アマゾン・ストロンガー・スカイライダー・スーパー1・ZX・RXが反応なし？！」

かがみ

「まさか、この調子だと？」

みゆき

「全種類、全滅ですか?!」

みさお

「うそおおおおつ?!」

あやの

「そ、そんな…。」

つかさ

「バルサミコ酢う〜！」

かがみ

「いやつかさ、それは関係ないって。」

こなた

「こうなったら、1号で…ライダー、変身…！」

こなた1号

「あ、出来たああああっ…！」

かがみ

「や、やったじゃない！」

つかさ・みゆき・みさお・あやの

「…」「素晴らしいっ…！」

シヤッフル

「あーあ、遂にやっちゃったよ、素晴らしいの四重奏。」

シヤイアン

「ま、別にいいじゃないか。」

こなたブラック

「ついでにブラックにもなれました。」

かがみ

「黒光りしてて、かっこいいわ。」

つかさ

「うん、こなちゃんかっこいいね。」

みゆき

「確か、ブラックはベルトの内にキングストーンという石が内蔵さ

れているそうですよ。」  
「こなた

「じゃあ最後だし、やってみるか。…キングストーン・パワー!!!」

バリバリバリバリッ!!! 全方位照射

ライダー全

「「「うわあああああーっ!最後の最後でえええええっ!!!」」」

かがみ

「やはり…。」

つかさ

「オチは…。」

みゆき

「これでしたね…。」

みさお

「凄すぎて…。」

あやの

「もう、びっくり。」

シャイアン

「では、今回は…。」

シャッフル

「この辺でお開き、とごじ事ば。」

ドサツ！！ こなた以外全員その場で倒れた

こなたブラック

「あるえ？」

こなたブラックは、キングストーン・パワーが本家の10倍強化  
されており、しかも全方位照射可能。

ポケ 2 昭和ライダーになろう！(上級生編)(後書き)

かがみ

「なんだかんだ言っつて、やっぱりこなたが一番強そうね。」

つかさ

「そうだね。シャイアンさんと同じ主人公だしね。」

みゆき

「そうですね。あ、でも皆さんも結構強かったですよ。」

あやの

「高良ちゃんも、中々強かったよ。私も、びっくりしちゃったし。」

みさお

「ところで、次回はどうするんだ？まだ他にもいるし。」

かがみ

「うん、作者さんの話だと次回は今回の続きだそうよ。ゆたかちゃん達が昭和ライダーに挑戦させるって。」

つかさ

「何だか楽しみだね。」

みゆき

「…あ、そう言えば泉さんはどうなさいました？」

かがみ

「今シャイアンさんが説教中よ。あれだけ広範囲に放ったから、そ

りゃあ怒るでしょうね。」

つかさ

「では、次回もお楽しみに。」

### ポケ 3 昭和ライダーになろう！（下級生&その他編）

こなた

「さて、今回はゆうちゃん達下級生と、はやと君が昭和ライダーの変身に挑戦するよ。」

つかさ

「でもこなちゃん、ゆたかちゃん達本当に大丈夫？」

こなた

「大丈夫、大丈夫。ベルトをつけて変身するだけでOKなんだし。それに、ここは究極空間だから万が一何かあっても大丈夫だよ。」

つかさ

「はう〜、でも何だか悪い予感が…。」

ひより

「まずは私ツスね。」

こなた

「ひよりん、頑張って！」

ひより

「大丈夫、問題ないツス！」

つかさ

「えー、1号・2号・V3・ライダーマン・アマゾン・ストロンガ  
I・スカイライダー・ZX・ブラックが反応ゼロ。」

こなた

「Xは反応するけど威力は…からっきし。ぶっちゃけあやのさんよ

り悪い。」

ひより

「orz」

つかさ

「ひよりちゃん、…ドンマイ。」

ひより

「でも、まだ負けないツス!…はああ、変身!」

ひよりスーパー1

「やった、出来たツスよ!」

こなた

「やるじゃん、ひよりん!…じゃあ、早速5ハンドを使ってみてよ。」

「

ひよりスーパー1

「んー、それではこれでも。」 レーダーハンド装備

ボツ!…キイ、ン。

つかさ

「どう?」

ひよりスーパー1

「…うっ!」

こなた

「どしたの?」

ひよりスーパー1

「は、範囲がメツサ広すぎるツス!」

つかさ

「わー、すごい！北半球全部が写ってる！」  
こなた

「範囲広すぎるよ！！」

ひよりRX

「いやー、感動ツス！まさか昭和最強のライダーにまで変身出来るなんて。」

つかさ

「そーだねー。私達だってRXは誰も変身出来なかったから。」

ひより

「そーだったんすか、先輩達より先に変身出来てすまない、と言っか…。」

つかさ

「ひ、ひよりちゃん！あまり気にしないで！！」

こなた

「じゃあひよりん、リボルケインを出してみてよ。やっぱり、これかなけりゃあRXじゃないから。」

ひよりRX

「じゃあ、やってみるツス。…リボルケイン！」

ブウンツ！

こなた

「あ…あるえ？」

ひよりRX

「…？」

つかさ

「これって…。」

こなた

「レーヴァテインだァー!!!」

ひよりRX

「な、何でえ?!」

つかさ

「どんだけー。」

こなた

「じゃ、次にバイオリダーに変身してみてよ。」

ひよりRX

「気を取り直して…えいつ!」

ひよりバイオリダー

「よしっ、成功!引き続き、バイオブレード!」

…ブウンッ!

こなた

「…え?」

ひよりバイオリダー

「ま、またレーヴァテイン?!」

つかさ

「ど、どうして?」

ひよりRXの場合、リボルケイン・バイオブレードの代わりに某魔法少女物のレーヴァテインが付属する。(中の人繋がり)また、バイオリダーの液体化能力も大幅強化されている。

こなた

「さあ次は、パティちゃんだよ。がんばって！」

パティ

「オーケー！マカせてクダサーイ！」

こなた

「えー、パティちゃんの場合、1号ライダーマンは反応なし。X、アマゾンとスカイライダー、ブラック・RXも反応なし。」

パティ

「オーマイガー…。」

こなた

「パティちゃん、ガンバ。」

パティ

「デモ、わたしはマケマセン…！変身！ストロンガー…！」

パティストロンガー

「ヤりました！」

こなた

「やるじゃん、パティちゃん！」

つかさ

「すっごーい！」

パティストロンガー

「サンキュー！」

ひより

「じゃ電気技は、何か使えそうなのある？少しやってみて。」

パティ

「オーライ、ツカってミマス!...エレクトロ・ファイヤー!」

バチバチバチバチッ!!

パラレル全

「「「きやああああっ!!」「」」

こなた

「やつぱり...。」 アホ毛炎上再び

つかさ

「やると思ってた...。」 リボンが燃えている

ひより

「これが全方位放射...。めっさ最強ツス。」 眼鏡があらぬ方向に

ねじ曲がっている

パティ

「ソーリィ...。」

パティZX

「コレがニンジャライダーなのデスカ。イツツ・ワンダフォー!」

こなた

「よかった、パティちゃんに気に入ってもらえて。」

つかさ

「うん、そうだね。」

ひより

「そう言えば、前回みゆき先輩がクロック・アップ出来たらしいから、パティちゃんにも出来るんじゃない？」

パティZX

「まあサスガにムリデスネ。…でもコレならデキルかも！」 ZX  
シューティング・スターを取り出して投げる

右 落次郎（散歩中）

「ぎにゃあああああつー！」 脳天に命中

パティZX

「オー、ソーリィー！」

こなた

「あ、あの人は気にしないで。むしろバンバン投げちゃって。」

落次郎

「何気に酷いな、オイー！」

こなた

「さて次は、みなみちゃんの番だよ。」

みなみ

「…では、いきます。」

つかさ

「みなみちゃん、頑張っつてね。」

こなた

「みなみちゃんの場合、1号ライダーマン、アマゾン・ストロンガー・スーパードンマイ・ZX・ブラック・RXが反応なし。…誰もライダーマンに反応しないのがおかしいね。」

みなみ

「…orz」

ひより

「まあ、これからツス。ドンマイ、ドンマイ。」

みなみ

「…気を取り直して、スカアァーイ、変、身!」

みなみスカイライダー

「…出来た。」

こなた

「やったー!やれば出来るじゃない!」

ひより

「そうツスね!…さて、問題は空を飛べるかどうかだけど、大丈夫ツスね。」

みなみ

「では、やってみます。…セイリング・ジャンプ!」 目の前から消えた

こなた

「…え?」

つかさ

「クロツク・アップ?!」

パティ

「オー!イツツ・ア・アメイジング!」

只今超高速で飛行中。

ひより

「ちょw待つて！私の目では速すぎて捉えられないッス！」

こなた

「私だつて無理だよ〜！」

つかさ

「はう〜、目が、目が…。」 目を回している

こなた

「さすがみゆきさんの近所に住んでいるみなみちゃん、クロック・アップも互角とは…！」

ひより

「いや、それ関係ないッス…！」

みなみX

「…こちらも、出来ました。」

こなた

「さすがみなみちゃん、Xも様になっているね〜。」

みなみX

「ありがとうございます。」

つかさ

「みなみちゃん、ライドルを使ってみたら？きっと、よく似合つと思っけど。」

みなみX

「では…ライドル・ステイック…！」

ブウンツ…！！

こなた

「…え？」

ひより

「何、この長さ…。」

つかさ

「4、5mはあるよ。」

パティ

「ライドル・ポールデスカ？セマイトコロではタタカえませんネ…。」

「

みなみ

「一体、これは…？」

みなみXの場合、ライドルの出力と長さ（笑）が向上、全体の性能も本家より10%アップしている。

こなた

「さあ出番ございますよ、ゆーちゃん！」

ゆたか

「うーん、田村さんやパティちゃんみたいに出来るかな…。」

こなた

「大丈夫、ゆーちゃんなら出来るって。」

みなみ

「…自信を持って。」

ゆたか

「あ、ありがとう、みなみちゃん。では、いきますー！」

こなた

「えー、1号〜V3までは反応なし、X・アマゾン・ストロンガー

は反応するものの、力は本家の50%以下。」

ゆたか

「orz」

つかさ

「ゆたかちゃん、落ち着いて。」

ゆたか

「はい。…では、これをやってみます。」

ゆたかライダーマン

「…出来ちゃった。」

パラレル全

「…ええええええっ!!」「」「」

こなた

「うっそ、ゆうちゃんがライダーマン、だと?」

ひより

「マジッスかああああっ!!」「」

つかさ

「すっごーい!!」「」

みなみ

「…おめでとう、ゆたか。」 少し照れながら

ゆたかライダーマン

「あ、ありがとう。」

こなた

「じゃあ早速だけど、カセット・アームを使ってみてよ。」

シャイアン

「ライダーマンと言えば、アタッチメントだからな。」 松葉杖を

ついて登場

こなた・つかさ

「うわっ、びっくりしたあ〜！」

シャイアン

「あ、すまない。おどろかせてしまって。」

ひより

「あーおどろいたあ、いきなり現れるから何事かと思ったツス。」

パティ

「それにしても、イッタイどこにイッテタのデスカ？」

シャイアン

「すまない、しばらくベッドで横になっていた。かがみ達も今治療中で、今回は無理だそうだ。」

こなた

「…私のせいだ…。orz」

ゆたかライダーマン

「と、とにかくカセット・アームを使ってみるね。」

パティ

「まず、ドリルアームをツカッテみてクダサイ。」

ゆたかライダーマン

「これね。」ドリルアームを装備、ただし何かが垂れ下がる

つかさ

「…ん？何これ？」

ひより

「…コンセント？」

ゆたかライダーマン

「えっ、何でコンセントが？」

シャイアン

「今思い出したが、ライダーマンのドリルアームは電源がないと動かないそうだ。」

こなた

「何それ!!」

ひより

「ドリルアームを使う意味ないッス!!」

みなみ

「そしてここには、電源がない…。」

ゆたかライダーマン

「orz」

ゆたか

「結局、パワーアーム以外は難しくて使いこなせませんでした。」

こなた

「それでも私達には(ライダーマンに)反応しなかった事を考えると大した進歩だよ、ゆうちゃん。」

つかさ

「そだねー。」

この後、他のベルトを試してみたものの反応はありませんでした。

こなた

「さて、次は凡骨の番ね。」

はやと

「何気に扱いが酷すぎない?先輩!!」

こなた

「冗談だよ。早くやって。」 何気に冷たい視線  
つかさ

「こなちゃん、ちょっと冷たすぎるよぉ〜。」

ひより

「あ、扱いがウヴァ並…。」

はやと

「先輩いいいいっ…!!」(泣)

こなた

「ま、そんな事は置いといて。…はやと君、泣きすぎだよ。だから冗談だつて言ってるのにな〜。」

はやと

「うわああああんっ…!!」(泣)

ゆたか

「お姉ちゃん!!」 リユウガのデッキ、スタンバイ

こなた

「…すいませんでしたあ…!!」

はやと

「僕の場合、1号〜V3までは先輩達と同じで、RXには反応しましたが、能力は発動しませんでした。」

こなた

「まさか、ブラックまで反応したとは…!!」

つかさ

「それだけ汎用性が高いって事かな?」

ひより

「そうでなければ、説明がつかないッス。」

みなみ

「すごい…!!」

ゆたか

「はやと君、すごい！」

はやとブラック

「ありがとうございます、先輩。」

こなた

「あ、でもキングストーン・フラッシュはやめてね。」 前回参照

つかさ

「絶対使わないでね。」

はやと

「わかってますって。…では少し物まねをしてもいいですか？」

こなた

「？」

はやと

「トライオー！」 両拳をぶつけた

カツ！！ 何故かキングストーン・フラッシュ発動

パラレル全

「うわあああああっ！ やってもうたあああああ！」「」「」

こなた

「だから、やめてって言ったのに…。」 髪型がポルナレフ  
はやと

「…ごめんなさい。」 丸コゲ  
つかさ

「みんな、大丈夫？」 リボンが燃えている

パティ

「オー、イツツ・ア・アメイジング…。」 黒コゲ  
ひより

「はやと君、とりあえずブラックは（RXも含めて）自重ね…。」  
髪型が遊戯王風になっている

はやと

「…はい。」

ちなみに、はやとがRXに変身した場合リボルケインの威力が1  
0%アップし、ロボ・バイオの能力も本家より20%アップする。  
（但し、ベルトに対応した場合）

こなた

「では、今回はここまで…」。ゲフン。」 口から煙

ちなみに、シャイアン・ゆたか・みなみは発動前に落次郎を無理  
矢理呼び寄せ、生身ガード・ベントをやらせる事により3人揃って  
助かりました。

落次郎

「くそ、あいつら…覚えてる！」

オルフェノク並に砂化



デイスラッシュ

「こいつぁ、強敵だ…!!」

あきらギルス

「なかなかやるな、あのバーコードロード…!!」

あきらギルス

「あばばばばばばばばあっ…!!」

トライオー

「何で私まで?!…ゴフウツ…!!」

つかさ

「こなちゃああああんっ…!!」

ボケ 4

「凄絶!あきらVSシャッフル く絶望が私のゴールだく」

みのる

「誰か、あきら様を止めてくれ…ガクッ。」

ポケ 4 凄絶！あきらVSシャッフル く絶望が私のゴールだ

本日は、こなた・つかさ以外のパラレルライダーと落次郎・はやと・唯は夏休みを利用して海へ行きました。（ちなみに今回シャイアンは夏風邪をひいて寝ています）

こなた

「はあー、まさか宿題がはかどらない状態で留守番をさせられるなんて、…不幸だ。orz」 数学を勉強中

シャッフル

「バカ言つな。朝までネットゲヤつてる方が悪い。」

こなた

「うう〜、行きたかったなあ、海…。」 未練タラタラ

シャッフル

「まあ、諦める。それよりも、そろそろつかさが冷や麦を持ってくるから、頑張れ！」 そろそろ正午

こなた

「おのれ宿題iiiiiiii!!」

シャッフル

「どこぞかのナルシストみたいな事は言わない!」

冷や麦、到着

つかさ

「…ところで、こなちゃん。宿題、進んでる？」 冷や麦を食べな



こなた

「ん？何、この地響き？」

つかさ

「何かこっちへ来てるよ？」

シヤツフル

「ん？誰かを追いかけてるぞ、ありや。」 双眼鏡で覗いている

あきら

「白石いいいいい！！！」

みのる

「ギヤアアアアアッ！！！」

こなた

「あれって、セバスチャン！？」

つかさ

「そうだよ、こなちゃん！」

セバスチャンとは、アニメ版らきすたにおける、白石みのるのニック・ネームです。

こなた

「しかも、追いかけてるのって、あきら様!？」

つかさ

「そうだよ、あきら様だよお!…でも、何でセバスチャンを追いかけてるんだろっ?」

こなた

「まさか、あきら様の弁当を間違えて食べたから、とか。」  
シヤツフル

「いや、それはないと思うが…。」

あきら

「戦え…戦えええええ!!」

シヤツフル

「おいおい、オーディンみたいなセリフが飛び出したぞ! 一体何があつた!」

みのる

「実は朝からあの調子で…。」 よつやく助け出された

こなた

「朝から?」

みのる

「ええ、スタッフ・ディレクター構わず戦いを挑んでいて、止めようもないんです…。」

つかさ

「どんだけ!」

あきら

「…、変身!…!」

あきら様はギルスに変身しました。

こなた

「うわあああああ、あきらギルスキター!!」

つかさ

「でもこなちゃん、今日のアきら様、様子がおかしいよね…?」

こなた

「うん、そだねえ。」

シャッフル

「何でえ、あんな桃ちよびれのチビ。何にも怖くないぜ。」

こなた

「シャッフルさん、挑発しちゃダメー!?!」

みのる

「ああ、もう知りませんよ!!」

あきらギルス

「…あ?」 背後に不動明王ゴットウーザオーラ

シャッフル

「凄まじいオーラだな…マスカ・レイド!」

『マスク・ライド デイスラッシュユ!!』

デイスラッシュユ

「全力で逝くぜ!!」 背後に大天使ディケイドオーラ(ただし激  
情態)

こなた

「何あの恐ろしいオーラ!!」

つかさ

「デイケイドの…完全体？」

こなた

「そんな事を言っていないで、ギルスの弱点が何か教えて？私が変身して止めるから！」

つかさ

「うん、簡単だよこなちゃん。…しょうがないなあ、私が教えたら…はうううう！！」 グリコのポーズで25mも吹き飛んだ

こなた

「つかさああああ！！！」

あきらギルス

「はあ、はあ、はあ…！」 右腕にゴリバゴーン、左腕にタジャスピナーを装備。ちなみに、つかさを吹き飛ばしたのは右腕のゴリバゴーン

こなた

「あ…あれって、確かオーズのコアメダルの…！！まさか、あきら様がグリード化！？」

シャツフル

「わからねえ…しかし、何とか止めないと…！！」

あきらギルス

「うがあああ…！！」 更に腕が4本生えてきた

こなた

「うえええええつ！？」

シャイアン

「マジで何者なんだ、あいつ…！！」

こなた

「仕方ないなあ、…トライオー…！！」



あきらギルス

「うがああああ…!!」 トラクロー・ウナギムチが右腕に追加、  
更に残った左腕がエクシード・ギルス化した

トライオー

「な、何なの！あのアシユラマン…!!」  
つかさ

「いくら何でもあきら様、やりすぎだよ！シャッフルさん、早く  
あきら…様を…。」

デイスラッシュ

「やるお…!!」 背後に暗黒破壊神アナゴ・ディケイド降臨

トライオー

「ガクガクブルブル」 怖くて震えている

つかさ

「ガクガクブルブル」 言わずもがな

2人は再び戦闘を開始し、トライオーとつかさは震えています

デイスラッシュ

「こいつぁ強敵だ…!!」

あきらギルス

「なかなかやるな、あのバーコードロード…!」

デイスラツシュ

「アンノウンと一緒にすんなああああっ!!」 怒りの一撃

バキイツ、ジャラジャラ…。 胸パーツのコアメダルが全て落ちた。

つかさ

「あ、メダルが。」

トライオー

「つかさ、回収しにいくよ!」

つかさ

「うん!」

回収中

つかさ・トライオー

「こいつぁ儲けたな!」 アンク風に

デイスラツシュ

「いい加減諦めてスタジオに戻れい!」

あきらギルス

「まだまだあっ!」

デイスラツシユ  
「ん？」

あきらギルス

「はあっ！！」 ギルスヒールクロー＋タコレッグ展開＋背後に暗  
黒破壊神アナザーアギトオーラ  
トライオー

「…へ？」

あきらギルス

「あばばばばばばばばばばばあっ！！」 暗黒破壊神ヒールクロー

タコレッグ乱舞

デイスラツシユ

「ブルアアアアアッ！！」 全弾命中

トライオー

「シャツフルさああああん！！」

つかさ

「あ、こなちゃん、危ない！」

あきらトライオー

「あばばばばばばばばばばばあっ！！」

再び乱舞

トライオー

「何で私まで？！…ゴフウツ！！」 クリティカルヒット  
つかさ

「こなちゃああああんっ！！」

つかさ

「よくもこなちゃんを……!!」 暗黒破壊神オーラ

あきら

「…ん？」

つかさ

「変、身っ!!」 照井 竜風に

アギトUB

「覚悟は、いい？」

あきらギルス

「さあこい、全てを吹き飛ばしてやる！」

デイスラツシユ

「つかさ、俺に任せろ。こなたを頼む。」

アギトUB

「えっ、シャツフルさん?!でもどうして!?!」

デイスラツシユ

「どうせ一度売った喧嘩だ、最後まで付き合っるのが筋ってもんさね。」

「カードを装填

『アタック・ライド ストライク・ベント!』 ドラッグクロー装備

デイスラツシユ

「食らええい!!」 昇竜突破

あきらギルス

「はあっ!!」 クワガタコアの雷撃で相殺

デイスラツシユ

「なら、次はこれだ!!」

『アタック・ライド 音撃棒・烈火!』 音撃棒を装備

デイスラツシユ

「これで、どうよ!」 火弾連射

あきらギルス

「うおおおおっ!」 シャチ・コアの水流で相殺

デイスラツシユ

「…これじゃ埒が開かないぜ。」

アギトUB

「どうするの?このままじゃあきら様が…。」

デイスラツシユ

「ん?そうだ、いい手がある!」

トライオー

「え、何々?」 復活

デイスラツシユ

「実は、おやつさんからテストで貸し与えられた物があるんだ。そいつを使ってみよう。」

トライオー

「そいつって?」

デイスラツシユ

「これだ、テスト用ダブルドライバー。丁度2人分あるから、変身を解いて装着してくれ。」

アギトUB

「で、シャツフルさんは?」

デイスラツシユ

「俺は、あいつを喰い止める！頼むぞ！」  
トライオー・アギトUB  
「うん！！」

2人は変身を解除し、ダブルドライバーを装備しました。

こなた

「じゃ、いくよ。」

つかさ

「うん。」

『タトバ！』

『ガタキリバ！』

こなた

「つか、何じゃこのメモリー！」

つかさ

「でも、やってみようよ！」

こなた

「何か気が進まないけど…。」

「変身！！」

『ガタキリバ！タトバ！』

オーズ(?)・G T t

「さあ、お前のパンツを数えろ！！(赤面)」

こなた（Tサイド）

「嫌だ、こんなセリフ！！（泣）」

つかさ（Gサイド）

「私もだよ〜！（泣）」

こなた

「けど、折角だからやってみるか…。（ため息）」 カマキリソー  
ド&トラクロー展開

デイスラッシュ

「おお、テストは成功だ！」

あきらギルス

「…？」

オーズ（？）GT

「「ありやあああああつ！！」」 めった斬り

あきらギルス

「ぎやあああああ！！」

デイスラッシュ

「よし、効果はバツチりだ！仕上げといくぞ、ご両人！！」

オーズ（？）・GTt

「「OK！！」」

『ファイナル・アタック・ライド デイ・デイ・デイ・デイスラッ  
ッシュ！！』

『タトバ マキシマム・ドライブ！！』

デイスラッシュ・オーズ（？）GTt

「「墜ちろおおおお！！」」 デイメンジョン・スラッシュ&タ  
トバ・エクストリーム

タトバ・エクストリームとは、Wのジョーカー・エクストリームのオーズ(?)版です。

チユドオオオオ...ン 命中&残りメダル全排出

あきら

「...ふにゅ〜?」

みのる

「あ、あきら様!?!...よかったー!!」

こなた

「しっかし、何故あきら様にコアメダルが...?」

あきら

「そう言えば... (黒モード) スタジオから帰る途中で、白衣のおっさんが何か投げ込んだのを覚えてるなあ...。」

つかさ

「まさか、それって...。」みのる

「コアメダル?」

シャツフル

「らしいな。それで、そのおっさん、肩に人形を乗せていなかったか?」

あきら

「あーそう言えば、薄気味悪い人形を乗せてたねえ。」

3人

「ドクター真木だアアアア！」

この後、ドクター真木は暗黒神オーラ全開の3人に鉄拳制裁を受け、ムッコロされました。

こなた

「今日は戦いに巻き込まれ…とばかりを喰らい…妙なメモリを使われ…」

つかさ

「本当に嫌だ…」

こなた・つかさ

「絶望が…私のゴールだ…!! (いろんな意味で)」

ポケ 4 凄絶！あきらVSシャッフル く絶望が私のゴールだ（後書き）

翌日、みんなが海から帰ってきました。

かがみ

「へえー、そんな事があったんだ。」

こなた

「みんなはいいよなあ…。勉強が早く終わって。」

つかさ

「どうせ私達なんか…。」

かがみ

「（まずい、こなたとつかさが地獄兄弟化してるわ）じゃあ、明日私達が遊んでいた海に行つてらっしやい。…ただし、旅館も民宿も予約がいつぱいだから、泊まるならみゆきの家に泊まっていつて。」

みゆき

「私のところでよろしければ…。」

こなた

「そだねー、少し頭を冷やしてくるよ。」

更に翌日こなた・つかさ・シャッフルは海に行きましたが、仮面ライダーアビスに勝負を挑まれたり、水のエルと乱闘戦になったり、ライオンクラゲヤミーに襲われたりと、海水浴を満喫出来ませんでした。

## 次回予告

かがみ

「これがオーズメモリー、ねえ…。」

オーズGS<sup>みゆき・みなみ</sup>

「さあ、お前のパンツを数えろ!! (赤面)」「

ゆたか

「わ、私も言うんですか?!」

シャイアン

「自動でしゃべるから、仕方がない…。」

みさお

「マリオシーケンサーか、このメモリーは!!」

ボケ 5 何故? オーズメモリー…さあ、お前のパンツを数えろ  
(笑) )

みさお

「何、このタイトル?」

あやの

「恥ずかしいよ、すく。」



ボケ 5 何故？オーズメモリー くさあ、お前のパンツを数える（笑）く

今回、こなた・つかさ・シャッフルの3人は、前回のダメージが大きすぎたため仮面ライダーウの世界で養生しています。

かがみ

「はあ…やはりこなた達も連れて行った方がよかったかも。」

みゆき

「仕方がありませんね。もう過ぎた事ですし。」

みさお

「おい、柊い。博士がこれをテストしてくれって言ってたよ。」

メモリーの入ったカバン持参

かがみ

「ん？何このメモリー？」 カバンを開けて

みゆき

「これが、噂のオーズメモリーですね。」

かがみ

「これがオーズメモリー、ねえ…。」 メモリーを手にして

みさお

「ねえ柊、試しにどれか使ってみる？」

かがみ

「うーん、そうねえ…まずは、どれがどうなっているのかが知りたいわ。」

ガラハド

「…なるほどね、それで私を呼んだと。」 徹夜明けでまだ眠い  
かがみ

「お休み中のところ本当にすみません。」  
ガラハド

「まあ別にいいけどね。…一応メモリーについては以下の通りだ。」

・メモリーの種類

1：ガタキリバ（ソウルサイド）

2：タジャドル（ソウルサイド）

3：ラトラーター（ソウルサイド）

4：タトバ（ボディサイド）

5：サゴーズ（ボディサイド）

6：シャウタ（ボディサイド）

・メモリーの使用条件

ソウルサイド：知力があり、戦術に長けている者。

ボディサイド：体力があり、持久戦に長けている者。

かがみ

「そう考えると、何となくWに似ているわね。」

みゆき

「そうですね。」

ガラハド

「百聞は一見にしかず、まずはやってみよう!」

ゆたか

「え、新しいメモリーのテスト、ですか?」

みなみ

「…何となく、悪い予感がします。」

かがみ

「まあ、そう言わずに。」

みゆき

「では、私はガタキリバで。」

みなみ

「私は、シャウタを。」

ゆたか

「みなみちゃん、頑張つて!」

『ガタキリバ!』

『シャウタ!』

「「変身!」!」

『ガタキリバ・シャウタ!!』くくく　みゆきの体はかがみが支えています

オーズ・GS みゆき・みなみ

「さあ、お前のパンツを数える!! (赤面)」

オーズSサイド

「な、何ですか、このセリフ。(赤面)」

オーズGサイド

「も、ものすごく恥ずかしいです、ああ…どうしましょう。(オロオロ)」　息が止まりそう

ガラハド

「あ、言い忘れたけど決めゼリフは自動的に出てくるから、気を付けて。」  
かがみ

(いや、ダメじゃん!!)　呆然としている

結局みゆきは変身解除後、あまりの恥ずかしさに気を失ってしまったため、かがみが看病しています。

ゆたか

「みなみちゃん、大丈夫?」

みなみ

「私は大丈夫だけど、精神ダメージが…」　さすがにボドボド

実は、セリフによっては（恥ずかしさによる）精神ダメージも加わります。こなたとつかさも、これにやられた様です。

みさお

「これ、セリフの部分だけ直したら？クールちゃん、ダメージがハ  
ンパねえし。」

ガラハド

「そうだなあ。…でも、違う人ならセリフも変わるんじゃないかな  
？（ジー）」 流し目

みさお

「…何故そこで私を見る？」

かがみ

「やはりここは…。（じとー）」

みさお

「…柊まで?!」

あやの

「何で、こうなったの…?」 ちょっと怒っている

みさお

「ごめんね、あやの。」 ガクガクブルブル

『タジャドル!』

『サゴーズ!』

「「変身!」!」

『タジャドル・サゴーズ!』』』

オーズ・T a S a みほお・あやの

「さあ、お前のクッキーを数えろ!!」

オーズ・T a サイド

「あれ？恥ずかしいセリフじゃない…。」

オーズ・S a サイド

「よかつたー！これが恥ずかしいセリフだったら後が怖くて、  
かがみ

（峰岸の事ね、わかるわかる。）

シャイアン

「父上がとんでもない物を作ってしまった、申し訳ない…。」 夏風  
邪から復帰

かがみ

「シャイアンさん、謝らなくてもいいんですよ。」  
みゆき

「私達の方は気にしないで下さい。」 でもあまり無理は出来ない  
シャイアン

「父上の不始末は私の不始末！ここから先は私が全て引き受ける！  
！」

かがみ・みゆき

「大丈夫なんですか!?!」

みさお

「これ、人によっては大ダメージも…!」

シャイアン

「大丈夫だ、問題ない。」

みゆき

(本当に大丈夫でしょうか…。)

シャイアン

「この中で、まだ試していない人は…?」

ゆたか

「私です。」

かがみ

「あ、待って。」

シャイアン

「どうした?」

かがみ

「シャイアンさん、決めセリフは自動的に出てくるから注意して。」

ゆたかちゃんも、そこに気をつけてね。」

ゆたか

「わ、私も言うんですか?!」 メモリーを受け取ってから

シャイアン

「自動でしゃべるから、仕方がない…。」

みさお

「マリオシーケンサーか、このメモリーは…!」 今頃突っ込んで

いる

ゆたか

「腹を括りました。」 完全諦めムード

シャイアン

「では、いくぞ。」

『ラトラーター！』

『タトバ！』

「「変身！！」」

『ラトラーター・タトバ！！』 〉 〉 〉

オーズ・RTa シャイアン・ゆたか

「「さあ、お前の騎士道を数えろ！！！」」

オーズTaサイド

「お、これは綺麗に決まったな。」

オーズRサイド

「はい！」 どこか嬉しそう

みなみ

「では、いきます。ゆたか、いけそう？」

ゆたか

「うん。みなみちゃんと一緒なら、大丈夫かも。」 少し自信が  
いた

『タジャドル！』  
『タトバ！』

「「変身！！」」

『タジャドル・タトバ！！』くくく

オーズ・T a T t

ゆたか・みなみ

「「さあ、お前のパンツを数えろ！！（赤面）」」

かがみ

「…あちゃく、やってもうた！！」

オーズT t t サイド

「…やっぱり。」 すぐに慣れた

オーズT a サイド

「あ、ああ、ど、どうしよう！！は、恥ずかしいよお！！？（赤面）」

あやの

「これ、確実に変質者のセリフだよ。」 顔が真っ赤

みさお

「…確かにねえ。」 腕組みしながら

城戸 真司

「…何で俺まで？」 博士のところへ取材に来ていた

秋山 蓮

「巻き添えは、ごめんだ。」 何かあると困るからついて来た  
かがみ

(いくらテストのためだからって、オリジン龍騎の方まで招かなく  
ても…。)

ゆたか

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい…」 ひたすら謝っ  
ている

ガラハド

「すまない、どうしてもデータがほしいんで…ご協力ありがとう  
ございます。」

城戸

「ま、俺は別に構わないんだけどな。どうする、蓮？」

秋山

「…仕方ないか。」

『ラトラーター！』

『シャウター！』

「…変身…！」

『ラトラーター・シャウター！』 } } }

オーズ・RS (城戸・秋山)

「…さあ、お前のパンツを数えろ…！」

オーズSサイド（城戸）

「…ライ」

オーズRサイド（秋山）

「何だ、この決めゼリフは!!」

城戸

「（強制変身解除）…ムッコロス！」 デッキ装備

秋山

「おい待て落ち着け城戸、相川 始が乗り移ってないか!？」

みなみ

「私も、お手伝いします。」 カブゼク装備

ゆたか

「みなみちゃん、落ち着いて!!」

剣崎 一真（2009年版）

「ここか、祭りの場所は。」 連れてこられた

橘 朔也

「ナズエオデマデ？」 巻き添え

ゆたか

「ごめんなさい…本当に、ごめんなさい（泣）」 平謝り

剣崎

「気にしなくてもいいよ、うん。」 サムズアップ

みなみ・ゆたか

「……。」 照れながらサムズアップ

橘

「ゴンバボドザゾグズロギギ、ザジャブザジレジヨグ。（そんな事

はどうでもいい、早く始めよう。）」「 何故かグロンギ語

パラレル全

「……橘さん、ここではリントの言葉で話して!!」「」「」

『ガタキリバ!』

『サゴーズ!』

「「変身!」」

『ガタキリバ・サゴーズ!』 } } }

オーズ・GSa(橘・剣崎)

「「さあ、お前のオンドウル( Pasta)を数えろ!」」

ゆたか

「橘さん、お腹がすいていますか?」

オーズGサイド

「ああ、少しだけな。」 実は2日間何も飲まず食わず

この後2人は、あやの達の作った Pasta を食べて帰って行きまし  
た。もちろん、城戸と秋山の両人も、取材後 Pasta をいただき満  
悦でした。

かがみ

「さて、トリは私がやるのね。」

みゆき

「あの、お心遣いはよろしいのですが…。」  
かがみ

「どっしたの？」

みゆき

「シャイアンさんが隅でいじけてますけれど、いかがなさいます？」

シャイアン

「orz」

かがみ

「あー、ごめん。すっかり忘れてたわ。」

ガラハド

「ヨイ。」

かがみ

「ではいきますよー！」

シャイアン

「…ああ。」

『ラトラーター！』

『サゴーン！』

「変身！」

『ラトラーター・サゴーン！』  
〜  
〜  
〜

かがみ・シャイアン  
オーズ・R Sa

「さあ、お前のパンツを数える！！（赤面）」

オーズ・Sa サイド

「父上、やはり何とかなりませんか？このセリフ…。」

オーズ・R サイド

「本当にね。…言ってる恥ずかしいわ、これ。」

みさお・あやの

「ところで、博士。」

ガラハド

「ん？どうした？」

あやの

「思ったのですが、ロストドライバーでテストした方がよかったです。…。」

みさお

「そうだけ、そっちの方が手っ取り早かったし、赤っ恥かかずにすんだし。」

ガラハド

「…すまん、ロストドライバーを買う予算がなかった。」 メモリ

「開発で手一杯

みさお・あやの

「ええええええええ！！！！」

ちなみに、今回ひより・パティ・落次郎・唯・はやとは、こなた  
とつかさ、シャツフルの看病のため仮面ライダーウの世界にいま  
す。

ボケ 5 何故？オーズメモリー くさあ、お前のパンツを数える（笑）く（後

あれから1週間後、こなたとつかさ、シャツフルが養生から帰ってきました。

こなた

「本当ひどい目にあつたね。」

つかさ

「そうだね、こなちゃん。生きた心地がしなかつたよ。」

シャツフル

「特に水のエル…あいつだけは許せねえ！！」 客を巻き込んで素手で殴り合っていた（not変身）

かがみ

「こなた、つかさ、シャツフルさん。本っ当にゴメン！！」 土下座

こなた

「うおっ！？いきなりどうしたの？かがみ！！」

つかさ

「あ、頭を上げて、お姉ちゃん。元々私達にも責任があつたから。シャツフル

「そうだぜ、それにもう過ぎた事だ、気にしちやいないぜ！！」

その後、みゆきやあやの達が間に入り、無事に仲直り（？）出来ました。

次回予告

(脳内BGM：『仮面ライダークウガ』より『開幕』)

ガラハド

「よし、みんなで裏世界のライダーに変身してみよう!」  
かがみ

「いやいやいや!」

かがみミラージュ

「何だろう、この違和感…。」  
こなた

「ま、アルティメットにもなれるから、無難じゃない?」

平沢555

「…変身出来ちゃった。」  
「うそっ!?マジで!!」  
「…唯って、オルフェノク?」

ボケ 6

「裏世界ライダー変身事情 何でこうなるの?」

はやと

「それより、僕の方の連載はどうなるの？」  
勝舞ハンド

滝の涙

「ま、気長に待とう。」  
諦めムード

## ボケ 6 裏世界ライダー変身事情 く何でこうなるの？

こなた

「さて、裏世界の話も大分進んでいる様だけど、私達はまだ『あれ』をやっていない事に気づいた!！」

かがみ

「で、『あれ』って何?」

こなた

「私達は、裏世界のライダーになっていない事だああ!！」

かがみ

「アホかああああ!！そうまでして裏世界のライダーになりたいわよ!！」

みゆき

「でも、面白そうですね。やってみる価値はあると思いますよ?」

乗り気

かがみ

「みゆき!？」

ガラハド

「よし、みんなで裏世界のライダーに変身してみよう!！」いきなり乱入

かがみ

「いやいやいや!！」

結局、全員第5世界までのライダーに変身する事にしました。

ガラハド

「けれども、だ。みんながみんな変身出来る訳じゃないから、そこには気をつけて。」

バラレル全

「……はい……。」「……」 一部乗り気じゃない

・仮面ライダーグランザムの場合

条件：一度寝て石碑に選ばれる事。

・夢の中・

石碑

『この10人の中から選ぶなら？』

こなた

「うん、誰ならグランザムになれそう？」

石碑

『うーん、そうだな……。そこの紫のツイテと、紫の片割れ、それに  
ブロンドの外人。』

かがみ

「えっ、私？」

つかさ

「わ、私も？ほええ。」

パティ

「ヤリマした、コナタ！」

こなた

「なるほど、風の属性が入っている関係か……。」

みゆき

「こればかりは、仕方ありませんね。」 炎属性

かがみグランザム

「クウガと違って重いから、動きが悪いわね。」

こなた

「ま、仕方ないね。かがみん。」 他人事のように

かがみグランザム

「かがみん言うな!!」

この後、トルネード・ディバステイターで吹き飛ばされました。

あやの

「柊ちゃん、どんまい。」

かがみグランザム

「こなたああああ…。(泣)」

つかさグランザム

「でも、思ったより軽いね。」

こなた

「うーん、人によりけり、つてところかな。」

パティグランザム

「オー!!イガイとカルイデース!!」

こなた

「ガルルさんと、どっちが軽い?」

パティグランザム

「コツチがカルイデスネ。」

その頃のガール

「orz」

・仮面ライダーミラーージュの場合

条件：沖田 知也に気に入られる事。

・闇の力を持つと同時に優しい心を持っている事。

沖田 知也

『この10人から選ぶのだな。』 今回、ゆのちゃんから許可をもらって借りてきました  
こなた

「お願いします、知也さん。」

つかさ

「でも、闇の力って随分限られた力だよね？」

かがみ

「まあね、相当闇が濃くなきゃ無理よ。ましては、優しい心も1セツトなんて…。」

知也

『その紫コンビのみ、それ以外は無理だな。』  
かがみ・つかさ

「私達は双子です!!!」

知也

『あ、そうだったのか。すまない。』 ちょっとボケてみた

かがみミラージユ

「何だろう、この違和感…。」

こなた

「ま、アルティメットにもなれるから、無難じゃない？」

つかさミラージユ

「私の場合は、UBに変身できるから関係あるよね。」

ゆたか

「いいなあ…お姉ちゃん達ばかり。」

ひより

「どうせ私達なんて…！」

こなた

「はい、ゆーちゃんにひよりん、地獄兄弟化しないで。お父さんが

悲しむから。」

ゆたか・ひより

「あ、それは大丈夫。」 なったとしても、ほんの一瞬

・仮面ライダールウの場合

条件：実は、ない

パラレル全

「……ええええええ！これは以外！！」

シャイアン

「本当だ。」 今回は調べる担当

みなみ

「……何となく龍騎みたいですね。」

シャツフル

「ま、そう言うことだ。」 今回はアイテム・人材担当

かがみルウ

「うわあ、軽い！すごく軽い！！」

つかさルウ

「スキップしたくなりそう、かある〜い」

みゆきルウ

「何だか新鮮ですね。」

みさおルウ

「うっひゃあ、軽いなあ、これ！！」 ルウの装備は軽く頑丈に作られています

あやのルウ

「まるで服を着ているみたい！すごく軽いわ！」

ゆたかルウ

「パピヨンちゃん、どう？」 パピヨンがサポート  
パピヨン

『はい、素晴らしく軽いです。さすが魔法金属ですね！』

みなみルウ

「…体が、軽い。」

ひよりルウ

「この軽さを555に生かせたら…!!」

パティルウ

「オー！ワンダフル！スバラしいデース！」

こなたルウ

「やっと変身できるライダーが見つかったよ。しかし、軽いね。」

「

・仮面ライダー陣雷の場合

条件：退魔の力を持つ者、あるいは忍者の末裔である事。

こなた

「何、適格者がいない…だと…!?!」

みゆき

「私も無理して試してみましたが、結局は…。」 鬼の力そのものが魔の力だと認識された

かがみ

「ま、どのみち無理よ。諦めなさい、こなた。」  
こなた



「きつとほら、あれだよ。『笑う角には副来る』、それしかないつて。」 その通り！！

ゆたか

「みなみちゃん達は、どうだった？」

みなみ

「…無理。」

パティ

「サスガにムズカしいデース。」 お手上げポーズ

ひより

「最初の条件が、クリア出来ず…。」 最初の耐性で黒焦げに

こなたライトニング

「ま、一応本家じゃ主役の1人だし。」 ニヨニヨにも適応

かがみ

「あんたはな。」

ゆたかライトニング

「ええええ、私まで変身出来たなんて、何だか不思議。」

かがみ

「ゆたかちゃんは、いつも笑顔だから適応出来たのかもね。」

ゆたかライトニング

「そうですね。」

ガラハド

「これで全員分終わったな。」

シャイアン

「ええ。しかし、このデータを一体どうするのですか。」 データ

も取っていた

ガラハド

「このデータを参考に、新しいライダーを作ろうと思ってね。」

シャイアン

「また作る気ですか!？」

翌日。

シャツフル

「おやつさーん、連れて来たぜ!」

ガラハド

「おー、ご苦労さん。」

シャイアン

「父上、一体誰を連れて来たのですか？」

平沢 唯（本編の平野 唯と区別するため、本名で呼称）

「シャイアンさーん、お久しぶりー!!」

軽音部

「「「今日はー!!」「「「「

沖田 ゆの（以下、ゆの）

「お久しぶりです、シャイアンさん。」

ケイン

「今日は、随分と女子が多いな。」

ジョー

「でも、姫の美しさにはかなうまい。」

日向 仁

「おお、笑顔が弾けてるな。」

シャイアン

「みんな！！：父上、まさか。」

ガラハド

「ああ、こなたちゃん達から変身アイテムを借りて変身大会を、な。」

「

こなた

「何か面白そうだねえ、手伝わせて。」 毎日ヒマ

シャイアン

「父上ええええええ！！！」

ガラハド

「：クウガとアギトはベルトを手に入れる事自体が無理なので、除外する。」

シャイアン

「まあ、まず無理だろうな。」

こなた

「手に入れるとしたら、自作するしかないよ。」

ガラハド

「龍騎も制限ゼロだから除外。：よって、555から始めよう。」

・仮面ライダー555の場合

条件：オルフェノクである事。

・オルフェノクの信号を埋め込んである者、ないしは人外である事。

こなた

「まあ、さすがに人外はいないでしょう。」

ゆの

「知也のサポート付きじゃ、ダメですか？」

ガラハド

「うーん、ちよつと難しいかな。…そもそも、ゆのちゃん自体が人外じゃないし。」

ゆの（知也）

「『ガーン!!』」

こなた

「おじさん、いくら何でも酷いよ…。」 背後に大天使ディケイド

（激情態）降臨

平沢

「今何か見えたー!!」

澪

「怖くない、怖くない…。」 ガクガクブルブル

こなた

「では、いないつて事で、次へ…。」

細

「あ、ちよつと待って。」

こなた

「…どしたの？紬ちゃん。」

平沢 555

「…変身出来ちゃった。」

澪

「うそっ！？マジで！！」

律

「…唯って、オルフェノク？」

ガラハド・こなた

「…興味深すぎる?!」「」

・仮面ライダーブレイドの場合

条件：アンデッドに適應している者

・異端者である事

こなた

「これは、どう？（特にゆのちゃん）」

ゆの

「これなら、知也さんのサポートで…。」

ガラハド

「うん、大丈夫だ。」 知也が憑依しているのでOK

ゆの

「よかった、知也さん。」

知也

『いや、本当によかった。』 嬉しそう

ケイン

「…と言う事は、私も変身出来ると。」 魔法が使えるのでOK  
ジョー

「俺も忍者だからOKだな。」 退魔の力だけでもセーフ

梓

「あの…。」

全員

「…どうした(の)?」「」

唯ブレイド

「私にも出来た!!」

全員

「…うえええええ!!」「」

ガラハド

「唯ちゃん、一体君の体はどうなってるの?」

・ケイン・ブレイドの場合、パンチ・キック力が+10t追加される。

また、ジャック・フォーム時には飛行速度が大幅に向上する。

・唯ブレイドの場合、ライトニング・ブラスト(ソニック、スラッシュでも可)の威力が50%アップする。また、他のラウズ・カードも併せて使用可能。

・仮面ライダー響鬼の場合

条件：とにかく鍛えている事。

こなた

「これは、ケインさん達が有利だね。」

シャイアン

「…そうだな。特に、ジョーは忍者だからバンバン鍛えているであろうし。」

ジョー響鬼

「当然だ。…しかし凄まじいな、鬼の力と言うのは。」 忍者として鍛えているため、鬼の力をビンビン感じている。

ケイン

「私は軍人だから、鍛えなければ、まず生き残れないしな。」

仁

「ところでジョー、着替えは持っているだろうな？」

ジョー

「着替え？何で？」

こなた

「響鬼から戻った時、着替えがないと全裸のままだよ！！」 赤面

ジョー響鬼

「それを先に言ええええええ！！」 着替えなし

唯響鬼

「よかつた、着替え持って来て。」

こなた

「でも、着替えるなら別の場所で着替えてね。」

・仮面ライダーカブトの場合

条件：カブトゼクター任せ

ジヨウ

「随分いい加減だな。」

こなた

「ま、仕方がないよ。…あ、みなみちゃんのカブトゼクターが飛んできた。」

カブトゼクター

『ギューーン!』 選択中

ゆの

「えっ、私!?!」

こなた

「すばらしいっ!」 どころかの社長風

シャイアン

「後は誰だ?カブトゼクター。」

ケイン

「私か…妥当だな。」

こなた

「ケインさんなら、カブトに変身しても安定して戦えるね。」

ケイン

「まあ、ね。」 少々照れている

シャイアン

「…後は誰か、大体わかった。」

平沢

「私だー」

全員

「「「やっぱりねー。」」」

・仮面ライダー電王（New電王）の場合

条件：異端者である事。

こなた

「この場合は、パピヨンちゃんに任せるよ。」

パピヨン

「『はい、私にお任せを。』」 ゆたかに憑依したまま参加

数分後。

シャイアン

「で、誰に適合したんだ？」

パピヨン

「『ゆのちゃんと、ケインさんに、ジヨーさん。…あと、唯ちゃん。』」

梓

「唯先輩、すごい。」

紬

「安定してますね。」

澪

「しかし、唯だけでこれだけ変身出来るのは、なぜだろう？」  
律

「ひょっとしたら石碑のおかげ、かな？」

こなた

(何だろう、細ちゃんが嬉しそうだ…。)

・仮面ライダーキバの場合

条件：魔皇力に耐性がある者

・ファンガイアである事。

こなた

「さあいよいよラストだよ。」

キバット

『うっし、キバっていくぜー!!』

シャイアン

「今回は、ゆのだけ外すぞ。」

ゆの

「うん、以前(TOUR 7参照)キバに変身したからね。」

知也

『あの時は本当に助かったよ。』

キバット

『まあな。エッヘン』 少しいばる

数分後。



ガラハド

「とりあえず、これで全て終了した訳だが…。」

シャイアン

「今日は本当に疲れたな。」

シャツフル

「俺なんか、まだみんなに変身アイテムを返さなきゃならないんだ、ここから忙しくなるよ。」

ガラハド

「さあーってと。研究所に帰って、冷たいビールでも飲むか。」

シャツフル

「俺も、こつちの仕事が一段落済んだら研究所に帰りませあ。」

シャイアン

「私は別にどちらでも構わないがな。」

こなた

「あのー、お三方。何か一つ忘れてますよ？」 怒りモード

シャツフル

「えー、何だったっけ？」

シャイアン

「あっ！まさか…。」 気づいた

ガラハド

「そうだった！！」 すっかり忘れてた

こなた

「まだシャイアンさん達のライダー適合が終わってないよ〜（泣）  
！！前もすっぱかして、今回もすっぱかす気なの！？」 滝のよう  
な涙&大泣きかみオーラ

シャイアン

「しかし、もうデータは取り終わったばかりだ、それにメモリに空きが無い。」　　UBSメモリにフル状態

ガラハド

「それに（作者の）次回のネタが既にまとまった後だから、それはまた改めてやろう。」

こなた

「…約束だよ。」

3人

「『ああ、約束しよう。』」

ポケ 6 裏世界ライダー変身事情 ～何でこうなるの？～（後書き）

事情説明中

XX

「…そうか。事情は大体わかった。」  
シャイアン

「とにかく、私やシャツフルのライダー適合を早く済ませてほしい。  
でなければ、こなたが怨霊化する。」

こなた

「ウランデヤル、ウランデヤル、ヤンデレテヤル！！」

XX

「お、落ち着け、こなた。ま、とにかくわかった。」  
シャイアン

「お願いします。」

こなた

「ヤンデレテヤルー！！」

次回予告

神崎 士郎・神崎 四郎

「誰だチミは!!」

シャイアン

「ぐがっ?!」

みさお

「ヴェアアアアア!!」

こなた

「誰だ、こんな企画考えたのはあ!!」

ボケ 7

「スーパー小ネタ大戦2011・解ゲボ」

みさお・あやの

「「はやと君、どんまい。」」

はやと

「どうせ、僕なんて…。」 1人地獄兄弟化

ポケ 7 スーパー小ネタ大戦2011 解ゲボ

1:カウント・ザ・メダル

こなた

「今、私達が使えるメダルは！」

・クワガタ

・シヤチ

・ギルス

・クジヤク

・カマキリ

・トラ

・ゴリラ

・ウナギ

・タコ

かがみ

「ちよつと待てこなた、一体どこで手に入れたの？そのコアメダル  
！…！…て言うか、1つだけおかしいのが混ざっているんですけどオ  
オオオオー！」

こなた

「あつ、本当だああああー！」 確認した

つかさ

「今まで気づかなかった！」

2：ところで…

かがみ

「こなた、ここにコアメダルがある、と言うことはオーズドライバ  
ーもあるはずよね?」

こなた

「えっ?」

……。

こなた

「ああっ!!」 頭を抱えている

かがみ

「ちよつと、オーズドライバーが無かったら変身出来ないじゃない  
!!」

結局、ガラハドがオーズドライバーを自作してくれるまで待つ事  
にしました。

3：シャイアンとかがみとお約束

かがみ

「シャイアンさん、前からずっと思ってた事があつただけど。」  
シャイアン

「どうした?藪から棒に。」

かがみ



シャイアン  
「なにいいいいい！」

ボグシャアアアア！ お約束の衝突

シャイアン

「うーん、いててて…。」 みさおが上に乗っている

みさお

「シャイアンさん、なんでここにいるの？危ねーよオ！」 シャイ  
アンを触りまくっている

かがみ

「日下部、大丈夫？」

みさお

「あ、柎。痛かったよ〜！」

シャイアン

「みさお、早く動いてくれ！重い！」

みさお

「あ、ごめん。」 すぐに動いた

かがみ

「そう言えば日下部の下敷きになってたけど、どうだった？」

シャイアン

「え？」

みさお

「え？つて、私に触った感触だぜ。」

シャイアン

「感触…まさか、私は女性に触れてしまったのか？」 全身が震え

ている

かがみ・みさお

「「？」」

シャイアン

「触ってしまった！…私は女性に触ってしまった！…ど、どうしたらいいのだ！…」 大混乱

かがみ・みさお

「「おおーい！！そんな大げさな！！」」

シャイアン

「触ってしまった…触ってしまった…orz」 ショックで立ち直れない

かがみ

「何だか悪い事しちゃったかな？」

みさお

「柀い、シャイアンさんのためにやったとは言えこの結果は…。」

実はかがみとグルだった

かがみ

「ちよつと最悪な結果になったわね…。」

その後、かがみとみさおはシャイアンに謝り倒して何とか機嫌は直りました。

4：NOTE 2のラストに現れた神崎 四郎は何者なのか？

神崎 志郎・神崎四郎

「誰だ、チミは!!」 伊東 四郎風に

と言うわけで、神崎 四郎は『こなたの世界』の神崎 四郎でした。

5：グランザムの世界の律の行動（TOUR 2の最初の方）

唯

「りっちゃん、私を狙っていたよ!!」

律

「えっ！狙っていたっけ!？」

澪

「（TOUR 2を読んで）あーっ！本当だあ!!」

紬

「律ちゃん、まさか!!」

梓

「先輩。。」

律

「待ていやあ!!私は唯の援護をしただけなのに、どうし…!そうかわかった!」

4人

「……どうしたの?」「」「」

律

「これも、乾 巧の仕業だ!!そうだ、そうに違いない!!」  
4人

「……いやいやいや!!……!」「」「」

いえ、作者の表現ミスです。

6：TOUR 10の文章に…

ケイン

「作者殿、地の文の中に同じ文が2つ入っていたのがあったが、あれは。」 PART 2の途中にあります

XX

「ああ、それなら『そこは大事な所だから2回言いました』と考えればいい。」

ケイン

「…本当なのか、それは。」

XX

「…まあね。」 自信なし

実は、後になって気づきました。皆さん、すみません。orz

7：ライター・パニック

みさお

「昨日、博士がオーズ・メモリーの改良に成功したって。」  
シャイアン

「ああ、話は聞いている。今回テストのためにこなたが名乗り出た





はやと

「あー、終わった終わった！長かったなー、始業式。」

勝舞ハンド

「ま、その分帰りのカード屋で買ったパツクの中に欲しかったレアが入っていたじゃないか、それで今日の運勢は五分だよ。」

ヒュルヒュルヒュル…。

はやと

「ん？何、この音？」

勝舞ハンド

「…！は、はやと、上だ上…！」

7人

「…は、はやと君、当たるよ…！」

はやと

「わああああ…げべろっばあ…！」 7人の直撃を受けた

ゆたか

「…うっ、いたたた。先輩、みんな、大丈夫？」

尻をさすりながら

みなみ

「…私は大丈夫、みゆきさんは？」  
みゆき

「ええ、何とか無事ですが…。それにしても、あれは一体？」

勝舞ハンド

「おーいみんなあ、下、下あー！」 下を指差す

7人

「…「?」?」」

はやと

「先輩…早く降りて、重い…。」 7人の下敷きのまま動けない

7人

「…「あつ、ごめんね!」」」 すぐにどいた

勝舞ハンド

「おい、大丈夫か？」

はやと

「僕は大丈夫だけど、まさか先輩達が降ってくるなんて…。」

ひより

「うん、流石にかわしきれなかったけど、みんなケガもなくてよかったツス。」

はやと

「あれ?…ちょっと待ってください先輩、今先輩達は全員僕の上に腰をおろしてましたね？」

7人

「…「うん。」」」

はやと

「ほわああああ!!…さ、触ってしまった!先輩に触ってしまった!!ああ、どうしたらいいんだ!!」 汗大量、大混乱

7人

「…えええええ!!それどういう事!!?」「」

はやと

「先輩に触ってしまった…触ってしまった…orz」 凄まじい落ち込み様

7人

(…(ど、どうしよう…。(…(… 全員冷や汗をかいてる

こなた

「誰だ、こんな企画考えたのはあ!!」 やつと止まった&背後に大天使力ザリ(完全態)降臨

かがみ

「何か怖いオーラが出てるよ、こなた!!」

みゆき

「泉さん、落ち着いてください!!」 こなたをなだめながら

シャイアン

「父上、何故ラトラーターが暴走したのですか!!」

みさお

「理由を教えるヨー!」 成層圏まで飛ばされたがシャッフルがタジャドル・メモリーで変身して助け出した

ガラハド

「…すまん、リミッターをつけるの忘れてた。」

全員

「…いや、リミッターはつけよう(ましよう(よ!!危ないから

！！！！！

ちなみに、ラトライターメモリーでの最高速度は時速350kmで、リミッターをつけると100km落ちます。今回皆が吹き飛ばされたのは、究極空間仕様です

そして、こなたはマニュアルをしっかりと読みましょう。きちんと止め方が書いてあります

#### 8：ボケ 4の真実

かがみ

「そう言えばみゆき、前（ボケ 4後書き）の海水浴でこなた達が療養した話だけど、何でこうなったの？」

みゆき

「はい、実は…。」

話は、こなた達が高良家に泊まりに来た時の事…。

こなた

「今日は酷い目にあっただねー。」

つかさ

「そ〜だよ〜。特に水のエルとヤミーには。」 ライオンクラゲ

ヤミーを素手で殴って倒した

シャッフル



こなた

「手強かったなー、シャツフルさんがいなかったらヤバかったよー。

」 あちこちがガタガタ

シャツフル

「…とにかく、早く部屋に入ってビールでも飲みたいぜ。みゆきさん、空いている部屋は？」

響鬼

「あ、すみません。今、弟子の治療のために部屋は全て使っています。」 とどのつまり、空き部屋無し

こなた

「そんな〜（泣）」

つかさ

「ゆきちゃん〜ん（泣）」

シャツフル

「…お2人さん、準備はいいかい？」 頷く2人

3人

「…不幸だあああああああ！！！！」 芦川シヨウイチバ  
りの絶叫+その場で気絶

その後、みゆきから連絡を受けたガラハドにより、3人は大八車に積み込まれて仮面ライダーウの世界に担がれ、太陽神教会で療養しました

かがみ

「…そうだったのね、今まで気がつかなかったわ。」  
みゆき

「みなみちゃんにも応援を頼んだのですが、ゆたかさんの家に泊ま  
りに行つてまして…。」

かがみ

「……何だか泣けてきちゃった。つかさ、こなた、ごめんね。（大  
泣）」 後悔してもすでに遅し

9：フォーゼのアストロ・スイッチ

ゆたか

「今朝、目が覚めたらベッドにこんな装置があつたんだけど、お姉  
ちゃん達は知ってる？」 謎の装置をこなたに渡す

こなた

「あーこれね。ゆーちゃん、これはアストロ・スイッチと言って、  
次の仮面ライダー・フォーゼが使用する『モジュール』を起動させ  
るための専用スイッチだよ。」 スイッチを手にして  
みなみ

「…このスイッチ、横に番号が振つてあります。これは一体？」

かがみ

「んー、これはモジュールのナンバーかな？らって書いてあるから、  
これは…。」

こなた

「マジック・ハンドだね、映画で見たからわかるよ。」  
かがみ

「あ、でもフォーゼ・ドライバーがないから今は使えないわね。」

こなた

「かがみ、言うのも何だけど、私使えるよ。」 ドヤ顔で  
かがみ

「…ちよっと待て。ドライバー無しでどうやって起動させるのよ。」  
ゆたか

「お姉ちゃん、本当に出来るの?」

こなた

「まあ任せてよ。まずは、スイッチを…。」

グサツ！ 左腕に差した

【マジック・ハンド!!】

全員

「…ええええええ!!腕に直差しいいい!?!?!」

こなた

「そして…ポチツとな。」 スイッチ・オン

【マ・ジ・ツ・ク・ハ・ン・ド・オン!!】

ウィーン、ガチャガチャ 変形中

こなた

「じゃーん、お待たせえ!」 マジック・ハンドがこなたの腕から

現れた

みなみ

「…すごい。」拍手  
ゆたか

「まるで手品みたい！すごい！」

かがみ

（これはある意味、才能ね。…って言うか、ドーパントじゃあるまいしどうやって腕にコネクターを取り付けたのよ！）

10：ラストは、ダイエットネタ

こなた

「かがみ、最近ダイエットはどうしたの？」

かがみ

「そうね、そう言えば全くやってなかったわね。」 戦いで忙しか

つたため

こなた

「それだったら、イクササイズやってみる？753呼んでくるけど。」

かがみ

「あー、それならやめて。あの人がいると、気温がサウナ並みにはね上がるし。」

こなた

「なら、DVDがあるから、それでやってみたら？」

かがみ

「うーん、そうねえ…。」

結局、やってみる事にしました。

753

『さあまずは、腕をふりなさい、ふりなさい。』  
かがみ

「…こっつ？」 腕を振ってみる

753

『更にふりなさい、ふりなさい。』  
かがみ

「…よし。」 更に振る

753

『もつと早くふりなさい、ふりなさい。』 速度が半端なく早い  
かがみ

「ちょwええっw」

753

『クロック・アップ並にふりなさい、ふりなさい。』 振りす  
ぎて腕が見えない  
かがみ

「できるかああああ!!」

この後も、『アクセル・トライアル並にけりなさい、けりなさい。』  
（振りすぎて足が見えない）、『ブレイド・ジャック並にとびなさい、とびなさい。』  
（本当に空を飛んでいる）等、無茶苦茶なダンス（？）ばかりでした

かがみ

「こなた、このDVDどうなってるの？通常じゃありえない動きばかりだし。」

こなた

「あ、ごめん。これ、海賊版だった。」 風都製のコピー版  
かがみ

「随分いい加減って言うか、ふざけた海賊版ね。…で、誰からもらったの？まさか、ガラハドさんからじゃ。」 青筋が100以上出ている

こなた

「うっん、あの人。」 別の方を指差す

かがみ

「？」

オリジン  
鴻上会長&里中

「あのDVDを実際に試す人がいるとは、素晴らしい！！」 秘書  
の里中と一緒に拍手  
かがみ

「あんたかあああああああ！！」 大激怒

その後会長と里中は、RUかがみによる自然発火+ギガントを喰らい、星になりました

ボケ 7 スーパー小ネタ大戦2011 解ゲボ（後書き）

こなた

「いや、疲れたねえ。」

かがみ

「いろいろと、ね。おかげで体中筋肉痛よ。」 肩をもみながら

ゆたか

「でも楽しかったですよ。」

こなた

「ありがと、ゆーちゃん。」 ゆたかの頭をナデナデ

ゆたか

「…ところでお姉ちゃん、シャイアンさんとはやと君はどいつなの？」

こなた

「？」

シャイアン・はやと

「女性に触ってしまった、触ってしまった：orz」

かがみ

「まだ落ち込んだのー!？」

## 次回予告

こなた

「いよいよやって来た！私達の望んだこの時が！！」

シャイアンBLACK

「…出来た、簡単に。」

かがみ

「うっそ、本当に!?!」

そうじろう電王WF

『降臨、満を持して!』

こなた

「一番似合わないのキター!!!」

XXフォーゼ

「宇宙、キタアアアア!!!」

全員

「ウゾダドンドゴドーン!!!」

ポケ 8

「陳情！チーム・シャイアン、ライダー適応事情」

はやと

「次回も、よろしく…」

1年生組

「ゼーッ…」「」「」

勝舞ハンド

「意味がちがうゼーッ…！」

「こちらが正しい使い方

ボケ 8 陳情！チーム・シャイアン ライダー適応事情

こなた

「いよいよやって来た！私達の望んだこの時が！！」

パラレル全

「……うんうん。」「……」 一斉に頷く

シャイアン

「まあ、皆が言わなくても私にはわかる。」

シャツフル

「俺達のライダー適応テストだろ？…心配しなくても大丈夫だって。」

┌

ガラハド

「今回は気合いを入れてテストを兼ねた物を作ってきた。まずは息子達の昭和ライダー適応をやり、次は君達パラレルのアイテムによるライダー適応、ラストは自家製フォーゼドライバー適応テストだ。」

┌

パラレル全

「……うわぁ遂に作っちゃったぁぁぁ！！」「……」 かがみ

「まあそれはいいわ。それより……。」

XX X

「あれ、これは珍しい。そうじろうさんじゃないですか。」

泉 そうじろう

「あ、このノベルの作者さん。こなたがいつもお世話になってます。」

┌

平沢 唯

「こんにちは。」

平野 唯

「あ、オリジナルの私だ。やつほ。」

右 落次郎

「何だ、この異様な空気は。」

秋山 澪

「何で、こんな事に…。」 ガクガクブルブル

琴吹 紬

「みなさん、楽しそうですね。」

かがみ

「作者さんや落次郎ならともかく、何でおじさんまで来るのよ!!」

こなた

「しかも来ちゃったよ、超適応者とその保護者…。」

平沢

「？」 笑顔炸裂

平野

「？」 上に同じ

紬

(ニコニコ) 言わずもがな

澪

「ライ破壊者2号。」

こなた

「ん？」 めっさいいスマイル&背後に大天使RUかがみ(激状態)

降臨

パラレル全(かがみ除く)

「『『『 きゃあああああ!!何あれええええ!!』』』」

かがみ

「何で私ーっ!?!」

澪

「怖くない、怖くない…。」 唯の背後に避難

紬

「まあ、綺麗な天使様。」 流石おぜうさま&聖人君子

・シャイアンの場合

シャイアン

「まずは、私からか。」

シャッフル

「…何かこう、何に変身出来るのか大体予想がついたけどな。」

こなた

「えー、ここから先は長くなりますので箇条書きでまとめます。」

・仮面ライダー1号

・スカイライダー

・仮面ライダーZX

平野

「流石シャイアンさんだね。」

平沢

「そだね。」

つかさ

「…でも、BLACKは無理なんじゃないかな?」  
かがみ

「そうね、キングストーンの力なんて一朝一夕で使えないから、やっぱり無理……。」

シャイアンBLACK

「…出来た、簡単に。」

かがみ

「うっそ、本当に!?!」

つかさ

「あ、でもシャイアンさん、すごくかっこいいよ。今のままでも十分合ってるよ。」

シャイアンBLACK

「そうか、ありがとう。」 少し照れている

ちなみにBLACK RXにも挑戦しましたが、無理でした。

シャイアンBLACKの場合、キングストーン・フラッシュの威力が光太郎BLACKよりも1・5倍アップしている。

・シャツフルの場合

シャイアン

「がんばれよ。」

シャツフル

「ああ、何とかやっつて見るわ。」

こなた

「それで、最終的に以下の通りになりました」

・仮面ライダー2号

・ライダーマン

「よく見ると、2号ばっかだね。」

シャッフルライダーマン

「まあこればかりは仕方がないさ。ところで…」

こなた

「何?どしたの?」

シャッフルライダーマン

「ドリルアーム用に用意したバッテリーは、どこにあるんだ?確か、おやっさんが持ってきたはずだけど…」

ガラハド

「ああ、それならあっちにあるよ。」 指さす方向に巨大なバッテリーが置いてある

女子全員

「「「ええええええ!!あれ工事用のバッテリーだよお!!」」」

かがみ

「ドリルアームを動かすだけでいいのに…」

つかさ

「どんだけー。」

シャッフルライダーマンの場合、カセット・アームの威力が50%アップする。

・右 落次郎の場合

落次郎

「俺だけ周りに味方がいないんだ、せめて結果だけは…！」

ゆたか

「落次郎さん、がんばって。」 励ましている

落次郎

「…ありがとう、どうやら神は俺を見放していなかった様だ。」

こなた

「…で、落ち武者の結果はこっち。」

・仮面ライダー1号

・同2号

・仮面ライダーストロンガー

・仮面ライダーZX

・仮面ライダーBLACK

「…全部悪の組織に改造されたライダーばかり。」 やる気ゼロ

落次郎BLACK

「…俺は元々ジョッカーの幹部だからな。仕方ないと言えば、仕方ないけど。それとこなた、俺は落ち武者じゃないからな。」

ゆたか

「では、向こうの本編（ノリダーの世界）が終わったら、こちらへ来て下さい。」 柔らかな笑顔で

落次郎BLACK

「ああ、そうするよ。」 同情されて嬉しい

・平野 唯の場合

平沢

「がんばって、私の「ピー」！」

平野

「うん、がんばるよ。」

紬

「あゝ、今思ったのですが…。」

平沢・平野

「「どしたの？ムギちゃん。」」

紬

「あまりにそっくりで、お2人の見分け方がわからないのですが。」

澪

「確かにそうだな。どっちが本物の唯なのか、はっきりさせないと。」

「

平野

「見分け方なら簡単だよ、澪ちゃん。私の右目の下に、こなちゃんと同じ泣きぼくろがあるのが私だよ。」

平沢

「あと、後頭部にアホ毛があるのも特徴だよ。」

澪

「まるでこなた先輩みたいだああああ！！！」

紬

「「こちらが、平野さんの結果です。」

・全て

…素晴らしいっ！！」「 某会長風に、ただし穏やかに

みゆき

「まさか、全適応者がまだいたなんて…信じられません。」

ガラハド

「いやまさか、コピーでも同じ結果になるうとは。」

こなた・かがみ

「「いやはや、すごい。」」

ちなみに、平沢の方でも試しましたが、結果は同じでした。流石、  
超適応者

・泉 そうじろうの場合

こなた

「お父さん、無茶だけはしないで。」

そうじろう

「大丈夫、ちゃっちやと済ませるから。」

かがみ

「…で、おじさんの結果がこちら。」

・仮面ライダースーパー1

でも、どうして?」

こなた

「多分、花粉症の時にやったネタつながりだね。」 詳しくはアニ  
メを参照

ちなみに、そうじろうスーパー1は冷熱・エレキハンドの出力が一也スーパー1の3倍にアップしています

・作者の場合

XX

「んじゃ、いくぞ。」

みゆき

「こちらが、作者さんの結果です。」

・ライダーマン

・仮面ライダーX

・仮面ライダーZ X

∴ 以外にXと名のつくライダーが多いですね。」

XX

「そうだな、それにメカ系も混ぜているしな。∴ あ、それと最後のほうでライダーマンを使ってやりたいことがあるから、とっておいて。」

ガラハド

「もちろんさあ」 ノリノリ

ガラハド

「さて、次はパラレル全員参加の平成ライダー適応テストに入るぞ。」

「

こなた

「例によって、クウガ・アギト・龍騎は除外して始めるよ。」  
今は助手として参加

・555の適応条件

- 1 オルフェノクあるいはオルフェノクの信号を埋め込んだ者
- 2 : 人外である事

適応者：かがみ、つかさ、みさお、みゆき、パティ、そうじろう

かがみ555

「私や人外かい。」 アマダムのせいで人外扱い  
こなた

「まさかお父さんまで人外だったとは。」  
そうじろう

「すまん、こなた…orz」 アナザーアギトだから  
あやの

「みさちゃん…。」  
みさお

「もう仕方ないヨ、あやの。腹は括ってるし。」 ジョーカー化に  
片足突っ込んでる

・ブレイドの場合

- 1 : アンデッドに適応している者
- 2 : 異端者である事

適応者：かがみ、つかさ、ひより、ゆたか、シャイアン、シャツフル、落次郎、XX

かがみ

「555に続いてブレイドもかい…。(泣)」 もう泣きそう

ゆたか

「先輩、ドンマイ。」

シャイアンブレイド

「私は騎士だから、当然だがな。」 もう慣れたもの

つかさ

「流石、シャイアンさん。」

落次郎

「何故俺も異端者扱い…orz」 ジョツカー幹部も立派な異端者です

シャイアンブレイドの場合、パンチ・キックの威力が+10t追加され、更にライトニング系の必殺技が剣崎ブレイドの2倍アップしている

#### ・響鬼の場合

1：とにかく鍛えている事

適応者：シャイアン、澪

こなた

「シャイアンさんと漣ちゃんが響鬼になった…だと…!?!」

みゆき

「そんなに鍛えているイメージはないのに、どうして?」 鬼もビ

ツクリ

シャイアン響鬼

「騎士として鍛えてはいるからな。それに自分の世界で変身した覚えもあるし。」 TOUR 1参照

漣

「いやでも、どうせ響鬼になるなら普通は律じゃないの?」 ギタ

1担当

ガラハド

「なら、ちょっとやってみるか?」 変身音弦を手渡した

漣轟鬼

「:Orz」

こなた

「漣ちゃん、ドンマイ。」

・カブトの場合

適応条件:カブトゼクター任せ

適応者:あやの、みさお、ゆたか、パティ

みなみ

「…ゆたかが適応してただけで、嬉しい。」

ゆたかカブト

「うん、私も嬉しい。」 仮面の下で赤くなっている

ひより

「…いかんいかん、何を考えているんだ、私は…！」 よからぬ事を考えていた

はやと

「先輩iiiiiiii!!」 乱入

・電王（New電王）の場合

適応条件：異端者である事。

適応者：つかさ、ひより、みさお、パティ、シャイアン、そうじろう、XX、紬

こなた

「うーん、つかさ達ならともかくシャイアンさん達はどうしよう…。」

パピヨン

「『そうだろうと思ひ、私の戦友を呼んできました。』」 ゆたかに憑依したまま協力  
そうじろう

「戦友？」

シャイアン

「一体、誰なのだろうか…気になるな。」

ジーク

『男性諸君、良きに計らえ。』

男性陣（ガラハド以外）

「…何iiiiiiii!?!?!」

シャイアン

「誰だ、この派手なイマジンは!?!」

ジーク

「派手とは失礼な!」

ガラハド

「ま、まあここは穩便に。ではジーク殿、よろしくお願いいたす。」

ジーク

『うむ、任せたまえ。』

そつじろつ電王WFF

『降臨、満を持して!』

こなた

「一番似合わないのキター!?!」

シャイアン

「…。」困った顔をしている

つかさNew電王PFF

「『シャイアン殿、一体どうなされた?体調を崩されたのか?』」

シャイアン

「いや、そうではない。確かに、ジーク殿は我ら騎士道に通じる何かを持ってはいるが、態度が大きすぎて…。」

つかさNew電王PFF

『「確かに。」』

そうじろつ電王WF

「態度が大きいなどと言わないでもらいたい！この無礼者が！」  
シャイアン

「…それが一番厄介なのだ。せめて態度を控え目にした方がいい、  
そうすれば変身するか考えてもいいが。」 威張り散らす人が嫌い

ゆたか

「ところでパピヨンちゃん、何故かがみ先輩は外してあるの？」

パピヨン

『本来なら私に適應出来るのですが、実は本人から「これ以上異端  
者扱いするのはやめてくれ」と訴えられまして…。』  
かがみ

「…orz」

・キバの場合

適應条件：魔皇力に耐性がある者

2：ファンガイアである事

適應者：あやの、みさお、シャッフル

あやのキバ

「…orz」 以外な結果に落ち込んでいる  
みさお

「私ならともかく何故あやのまで…orz」

パティ

「シカタありませーん。コレバカリはワタシでもドウにもナリマセ  
ンから。」

キバツト

『しかし、可能性が広がったと考えればいいんじゃないか？』 あ  
やの励ましている

あやのキバ

「…可能性、か。」

みさお

「そうだな。あやのは龍騎だけが取り柄じゃない、他にも力がある  
んだって事を証明したから。」

あやのキバ

「うん、そうだね。みさちゃんの言うとおりね。」 立ち直った

ガラハド

「さて、ここからはフォーゼドライバーの適応テストに入るぞ。」

平沢

「待ってましたあ！」 フォーゼ確定のため、平野同様見てるだけ

漣

「ま、唯は超適合者だから仕方ないとして、私達はどうなるの？」

ガラハド

「もちろん、やってもらうよ。当然さあ。」

漣

「やっぱり、やるのか…ここまで来たんだ、やってやるつもりじゃない  
の！！」 吹っ切れた

細

「私も、漣ちゃんにつき合います。」

かがみ

「スイッチは、すでに差し込んだ状態ね。」

みゆき

「そして、下の赤いスイッチを全てオンにして、かけ声と共にレバ  
ーを引くのです。」

かがみ

「…ごうね？」 スイッチ・オン

『3…2…1!!』

かがみ

「変身!!」

カチツ、カチツ… レバーが完全に引かない

かがみ

「…あるえ？」

つかさ

「レバーが、動かない…？」

かがみ

「だあああああ!!こんなんじゃないだめだ!!」 頭にきて外した

パティ

「オーノー…ダメでシタ。」 ロケット先進国なのに変身出来ず

あやの

「ごめんなさい、無理です。」

みさお

「これ、本当に成功するのか？」

ひより

「うーん、555はよくてもフォーゼは、ねえ…。」

つかさ

「レバーが固いよお。」

ゆたか（パピヨン）

「…だめです、レバーが固すぎてビクともしません。』」

みなみ

「…無理ですね。」

みゆき

「鍛え方が足りないからでしょうか？動きませんね…。」 鍛え方の問題ではありません

シヤツフル

「そもそもおやっさんの作ったドライバーだからな。ムラがあるんだよ、これ。」

漣

「動かない…orz」

紬

「私がやっても、無理でした。」

落次郎

「くそつ、だめだ!!」

そうじろう（ジーク）

「『ふむ、私にも動かせない物があるつとは…。』」

こなた

「私は、どうかな？」

『3…2…1!!』

こなた

「変身!!」

ガコンッ!!

こなたフォーゼ

「フルボッコ張らせてもらっよん」

全員

「『ええええええ!!』」

XX

「どれ、こなた、私にも。」

こなた

「あいよ」 ドライバー、パス

XXフォーゼ

「宇宙、キタアアアア!!」

全員

「『ヴゾダドンドゴドン!!』」

シャイアンフォーゼ

「私にも扱えた。…ある意味奇跡だな。」

女性陣全員

（（ま、シャイアンさんだからねえ…。（（（

男性陣全員

（（（当然だな。（（（

こなた

「ついでだから、はやと君もやってみて。」

はやと

「では、逝きまーす！」

ひより

「は、はやと君！字が違うよ！！」

はやとフォーゼ

「…あれ？」

ひより

「は？」

全員

「「「出来ちゃったあああああ！！」」」

ガラハド

「そう言えば作者が最後にライダーマンでやりたいことがあるから、  
って言ってたけど、何だろうな？」

シャイアン

「多分、あれだろう。」 別方向を指差す

XXライダーマン・バース・デイ（？）

「じゃーん、お待たせ！どうよ！！」 コテコテの重装備、しかも  
バースの

全員



『ギ・ガ・ン・ト・オン!!』 ギガントモジュール起動

こなたフォーゼ

「発射あああああ！」 ギガント乱れうち

XXライダーマン・バース・デイ

「ぎゃあああああ!!」 全弾命中

その後、バースの装備は黒焦げのまま毒島に返され、作者はこなたフォーゼのランチャー・リミットブレイクにより星になりました

ポケ 8 陳情！チーム・シャイアン ライダー適応事情（後書き）

― その後 ―

毒島バース

「あ、あれ？」 クレーンアーム使用中

たまき

「ぶっさん、どうしたの？」

毒島バース

「うん、クレーンアームの飛距離が何となく伸びた様な気がして…。

」

たまき

「え？」

毒島バース

「それに、他の装備も威力が変にアップしてるの。おかしいと思わ

ない？」

たまき

「何でだろうっ？」

実は、ガラハドがバースの装備の修理をした際、威力アップ&ク  
ロックアップ+ギガント使用可能といった魔改造をしていました。

次回予告

かがみ

「まさか、本当にやるの？」

ガラハド

「もちろんさア」

つかさタジャドル

「わ、わわっ、制御が利かないよおおおお!!」

全員

「「えええええ!!」」

みゆきブラカワニ

「セイヤアアアア!!」

XXガタキリバ

「ぐげごばしゃあっ!!」

こなたシャウタ

「ウナギクラーツシュ!!」

かがみタトバ

「…ひでぶっ!!」

ボケ 9

「オーズメモリー・フォーエバー　くペンダラ、真っ赤に燃えてく」

はやと

「次回もよろしく…」

1年生組

「ゼーッ!」「ゼーッ!」「ゼーッ!」

はやと

「…え、1人多いけど誰？」

勝舞ハンド

「誰だ？」

???

「それは次回で…。」

ボケ 9 オーズメモリー・フォーエバー くベンダラ、真っ赤に燃えてく

ガラハド

「さて今回、我々は。」

シャイアン

「『仮面ライダードラゴンナイト』の舞台、ベンダラに来ている。」

こなた

「…でも、なんでベンダラなの？いつもの究極空間で間に合うのに。」

「

かがみ

「こなた、もう忘れたの？」

つかさ

「こなちゃん、以前博士がここでなきやテスト出来ない物がある、  
つて言ってたよ？」

みゆき

「あ、でも何のテストなのかまでは、まだ聞いていませんね。」

ガラハド

「それについては、このアタッシュケースの中に答えが入っている  
よ。」 アタッシュケースを取り出す

こなた

「この中に、ねえ。」

ガチャツ、キイー ケースを開けた

つかさ

「…これって。」

こなた

「オーズメモリー!?!」

みゆき

「ひよっとして、これのテスト、ですか?」

かがみ

「まさか、本当にやるの?」

ガラハド

「もちろんさア」

こなた達

「「「いやいやいやいや!?!」」」 ボケ 4 & 5で懲りている

シヤツフル

「まあそう言わずにテストに付き合ってくれ。それに、今回はゲストもいるんだ。」

つかさ

「ゲスト?」

シヤツフル

「彼女だ。」 手招きで呼んでいる

いずみ

「こんにちは。若瀬 いずみ、仮面ライダーオーズです。」

こなた

「へー、彼女がオーズなんだ。」 ジト目で見る

いずみ

「あの、私が何かしたのですか?」

かがみ

「いえ、ちよっとね。」 軽くウィンク

つかさ

(ひよつとしたら、彼女もオーズメモリーの開発に関わっているんじゃない…?)

ガラハド

「じゃ、説明するよ。今回は、オーズメモリーをロストドライバーにセットしてテストする。」

こなた

「やっと手に入ったんだね、ロストドライバー。」  
シヤツフル

「ああ、企業のバックアップがようやく付いてな。おやつさんも喜んでいたよ。」 ロストドライバーを見せる

こなた

「ああ、懐かしいなあ。これを使う事自体が…。」 しみじみ見る  
シヤイアン

「そ、そんなに懐かしいのか、これ…。」 ロストドライバー時代のこなたを見ていないから

つかさ

「ところでこなちゃん、今はロストドライバーを使っても大丈夫？」  
こなた

「うん、もう大丈夫だよ。」 トライオーに変身出来る時点で解消  
済み

ガラハド

「それで、だ。いずみちゃんもオーズに変身してメモリーのテストを手伝ってもらおうよ。」

みゆき

「それで、若瀬さんも呼んだ訳ですね。」

ガラハド

「そうだ。いつもなら究極空間でやりたいところだけど、こういった障害物のあるところでテストしないと、威力や運動性のデータが取れないからね。」

かがみ

「なるほどね。」

シャイアン

「まずは、つかさといずみから開始しよう。準備はいいか？」

いずみ

「はい、大丈夫です。」 メダル装填済み

つかさ

「いつでもどうぞ。」 オーズメモリーを手にしている  
シャイアン

「では、テスト開始！」

『タジャドル!!!』

つかさ

「変身！」

『タジャドル!!!』 〵 〵 〵

いずみ

「変身！」

『ライオン!クジャク!ゾウ!』

つかさタジャドル

「じゃ、いくよ。」

いずみラジャソ  
「どうぞ。」

バツ！！ つかさタジャドルがクジャクウイングを展開、大空へ

いずみラジャソ

「そおいつ！！」 タジャスピナー乱射

つかさタジャドル

「はあああっ！！」 つかさにしては珍しく華麗に回避&タジャスピナーで反撃

いずみラジャソ

「はっ！！」 タジャスピナーで防御

ガラハド

「ほほう、これは興味深い。」

シャツフル

「つかさも、やるな。」

こなた

「なかなかやるじゃない。」

かがみ

「これも、ある意味才能ね。」

いずみラジャソ

「…あれ？」 乱射中止

ガラハド

「どうした？」

いずみラジャソ

「タジャドルの動きが、おかしいんですけど…。」

つかさタジャドル

「わ、わわっ、制御が利かないよおおおお!!」 制御装置が壊れた

全員

「「「ええええええ!!」「」」

シャイアン

「ビルに激突するぞ!!」

ドガアツ!! 壁に激突後、内部へ

つかさタジャドル

「きゃあああああ、オツペケテムツキイイイイ!!」

ボコンッ!! 反対側へ抜け出した

ガラハド

「ビルが…。」

ガラガラガラガラ、ドドドドド… ビル崩壊

シャイアン

「あっという間に瓦礫の山に…。」

シャツフル

「おいおい、まずいってこれ!!」 顔面蒼白  
かがみ

「ちょwつかさw」 上に同じく

結局、いずみがタジャドルにコンボチェンジした後、空中からドロップキックを決めてやっとなまりました。

ガラハド

「次はみゆきさんか。」

みゆきブラカワニ

「私の相手は、一体誰なのでしょう?。」

XXガタキリバ

「私だ。」

みゆき

「え、作者さんですか?...と言うより、どうしてです?。」

シャツフル

「何でもな、オーズ本編の単体コンボの中で唯一出番が少ない(劇場版除く)から、少しでも出番を稼ぎたくて使ったらしい。」

みゆき

「こればかりは、向こうの事情ですから仕方ありませんね。」

ガラハド

「では、テスト開始!。」

みゆきブラカワニ

「作者さん、参ります！」

XXガタキリバ

「よし、来なさい！…ん？何故分裂しないんだ？」 1体のまま

ガラハド

「…すまん、メモリーに分身のデータが入りきれなかった。」 全  
て入れるとメモリーがパンクするため

XXガタキリバ

「ま、仕方ないか。じゃ、いくぞ！」 カマキリソード展開、即攻撃  
みゆきブラカワニ

「はっ！」 カマキリソードをシールドで弾いた

XXガタキリバ

「くっ、あのシールドは当たると結構固いな。手が痺れるよ。」

みゆきブラカワニ

「そおいつ！」 ワニレッグで顔面を蹴り上げた

XXガタキリバ

「ぐげっ、ならピカチュウ並の電撃を喰らえ！！」 頭部から放電

みゆきブラカワニ

「何のっ！！」 シールドで防いだ

ドオオオオオ…ン 反射した電撃が高速道路の柱に命中、崩壊

ガラハド

「高速道路が…。」

かがみ

「崩れた…。」

XXガタキリバ

「…これ以上被害が出たらシャレにならなくなってくる！一気に決めねば！！」 スロットルにセット

『ガタキリバ マキシマム・ドライブ！！』

みゆきブラカワニ

「…。」 ブラインギーでコブラ起動

XXガタキリバ

「コブラなんか呼び出して、何をする気だろうか？…にしても。」

ガラハド

「?どした？」

XXガタキリバ

「…何だ、このめっさ少ない分身はああああ！！」 10体しかない

いない

こなた

「うわ、少なさ！！！」

ガラハド

「…ごめん、メモリーの容量だと10体までが限界なんだ。」

XXガタキリバ

「ええええええ！それは困るよ！！…でも仕方ないか。」

みゆきブラカワニ

「…本体を見抜きました！」

XXガタキリバ×10

「…いけええええええ！！！！」 ガタキリバキック（ただし威力は5分の1）

みゆきブラカワニ

「決めます！！」 メモリーをセット

『ブラカワニ！マキシマム・ドライブ！！』

XXガタキリバ×10

「っっん？」

みゆきブラカワニ

「セイヤアアアア！！」

分身をすり抜けワーニングライド

XXガタキリバ

「ぐげごばしゃあっ！！」

本体直撃

いずみ

「す、すごい…。」

ガラハド

「いやはやすごいな。ブラーニングの能力で、コブラヘッドをレーダー代わりに使うとは。」

みゆきブラカワニ

「いえ、お恥ずかしながら。」

かがみ

「ところで、作者さんは？」

みゆきブラカワニ

「え？」

XXガタキリバ

「うう…。」  
「ギャグ漫画みたいにビルの壁に張り付いているつかさ

「ゆきちゃん、これはちょっと…。」

みゆきブラカワニ

「あ、ごめんなさい！！」

ガラハド

「さて、作者は置いといて。」

つかさ

「作者さん、放置するの?!?!?」

シャイアン

「次は、こなたとかがみがテストを担当するのだが…。」

こなたシャウタ

「私やシャウタか。ま、いいけど。」 オーズのスペック中最下位

かがみタトバ

「んっふっふっ。今回ばかりは私の勝ちね。」

ガラハド

「それはどうかな?」 何か隠してる

シャイアン

「では、テスト開始!」

こなたシャウタ

「ウナギクラーツシュ!!」 ウナギムチ展開(ただし先端に分銅

あり)

かがみタトバ

「ひでぶっ!!」 横殴りに命中

こなたシャウタ

「更にシャチビーム!!」 目から光線

かがみタトバ

「うきやあああああ!!」

こなた

「仕上げのタコドリルキイイイイック!!」 左足だけタコ足

ドリルに変形

かがみタトバ

「ぐげごばしゃあっ!!」 顔面直撃

つかさ

「い、痛そ〜う…。」

いずみ

「は、博士!あのシャウタ、少し反則ですよ!」

ガラハド

「あ、あれね。シャウタの低スペックを補うために少し改良しておいたんだが。」

いずみ

(いや、いくらシャウタが弱いからって分銅や光線は少しまずいんじゃない?)

かがみタトバ

「こなた、調子に乗るのもいい加減にしないよ…?」 RUオー

ラ全開

こなたシャウタ

「仕方がないよ、これもテストなんだし。」

かがみタトバ

「けど、いきなり必殺技オンパレードはないと思うけど?」 指ポ

キポキ

こなたシャウタ

「かがみ、凶暴〜!!」 火に油

かがみタトバ(中身はRUかがみ)

「やかましい!」 自然発火能力、発動

こなたシャウタ

「きゃあああああ、あちちちちち!!」

XX

「あゝあ。」

つかさ

「お姉ちゃん、ストップストップ!!」

みゆき

「泉さんも、少し言い過ぎです。」

いずみ

「あの、私は何も言ってますが。」 少しふくれている

みゆき

「あ、若瀬さんの事ではありませんので。」

シャツフルシャウタ

「…で、結局俺か。」

こなた

「……。」 ちよつと焦げただけ

かがみ

「仕方ないわよ、こなたが悪いから。」 結局テストから降ろされた

シャツフルシャウタ

「でもって、テストの相手が…。」

いずみライター（ただしオーズドライバー版）

「 嬉しそう

シャツフルシャウタ

（駄目だ、勝てねえ…勝てる訳ねえ…。） シャウタはライター

ーと相性が悪い

ガラハド

「では、テスト開始！」

シャッフルシャウタ

「じゃあねえ、やってみるか！」 分銅ウナギムチ展開

いずみラトラーター

「行きまーす！」 トラクロー展開

シャッフルシャウタ

「ウナギクラーツシユー！」 分銅ウナギムチを振り回す

いずみラトラーター

「はっ！！」 マトリクスの緊急回避

シャッフルシャウタ

「やるな、嬢ちゃん！」 いずみラトラーター

「シャッフルさんこそ！！！」

ガラハド

「へえー、オーズメモリーでもやるねえ。」

シャイアン

「さすがだ。」

ー 15分経過 ー

シャッフルシャウタ

「はあ、はあ、はあ……。」「

いずみラトラーター

「な、なかなかやるわね、シャッフルさん……。」「

つかさ

「すごいね、いずみちゃん。」「

こなた

「ん？私？」 復活

つかさ

「あ、こなちゃんの事じゃないから。」

かがみ

「まさにすさまじい戦いね…。」

みゆき

「多分、次の一撃で決まるでしょう。」

シャッフルシャウタ

「んじゃ、いくぜ！」 スロットにセット

『シャウタ・マキシマム・ドライブ!!』

いずみラトラーター

「では、私も！」 スロットにセット

『ラトラーター・マキシマム・ドライブ!!』

シャッフルシャウタ

「喰らえ、オクトバニツシュ!!」

いずみラトラーター

「受けなさい、ガッシュクロス!!」

ゴッ、ドオオオオオ…ン ビル1棟が崩壊、周囲の建物に至っては完全崩壊

こなた

「い、威力ありすぎ…!!」

かがみ

「何、このオワタゲー。」

つかさ

「ち、ちよつと…どうして?」

みゆき

「もうすでに、ここ周辺が焼け野原ですよ…。」

シャイアン

「ち、父上…これは一体…。」

ガラハド

「うーん、何でだろう?こんなに威力を上げたつもりはなかったけどな…。」

シャイアン  
プトティラ

「そして、ラストは私か。」

シャツフル

「にしても、本気で殴らなくても…。」　こなたに殴られた

いずみ

「いたたたた…。」　かがみにデコピンを喰らった

こなた

「当然だよ、ビル1棟破壊したつかさならともかく。」

つかさ

「こなちゃんのくせに…!!」

かがみ

「ま、仕方ないわよこなた。でも、これはさすがに要調整ね。陳情書を書いている」

みゆき

「それにしても、シャイアンさんの相手は一体誰でしょう?」

ガラハドサゴーズ

「じゃーん」

全員

「「「ええええええ!!?自ら名乗り出たあああああ!!?」」」

こなた

「オワタ、完全にオワタ。」

つかさ

「親子対決になっちゃったよお〜!お姉ちゃん、どうしよう!?!?」  
意外な展開にあたふた

かがみ

「ねえみゆき、誰か止める人はいないの?」

みゆき

「この状況で止められるとしたら...。」 かがみとつかさを見る  
こなた

「こなたは...。」 みゆきと同じく

かがみ・つかさ

「「「えええ...、やっぱり。」」」

こなた

「ま、心配しなくてもいいよ。飽くまでかがみ達は保険だし。」  
みゆき

「そうですね、万が一を考えての事ですから。」  
かがみ・つかさ

「「「保険、ねえ...。」」」

シャッフル

「では、テスト開始！」

シャイアンプトティラ

「いくぞ。」

ガラハドサゴーズ

「よし、バッチコイー！」 腕をブンブン振り回している上、  
何故か大天使サゴーズオーラが発動  
いずみ

「やる気マンマンだあああああ！しかも変なサゴーズが見えたあ  
あああああー！」

こなた

「おじさんなら、やりかねないよ…。」 あなたもね

ー 10分経過 ー

2人のテストは、サゴーズの重力が辺りを破壊炎上し、プトティ  
ラが氷結攻撃で鎮火しながら（でも炎上場所が広すぎて間に合わない）攻撃する、といった面倒くさい攻防を繰り返していました

シャイアンプトティラ

「はああっ！」 空中から氷結攻撃

ガラハドサゴーズ

「ふんっ！」 重力操作で回避&ゴリバゴーンで反撃

シャイアンプトティラ

「そおいつー！」 空中で回避しながらパンチ

ガラハドサゴーズ

「ふおおおおっー！」 マトリクス的に回避

シャッフル

「いやすごいな、この時点では双方互角だ。」  
つかさ

「あの2人のパワー差って、確かプトティラが10tでサゴーズが8tだったよね、こなちゃん？」 パンチ力の話です  
こなた

「うん、そうだよ。」  
いずみ

「でも何だか博士の方が押ししてる気がするけど、何故だろう？」  
シャツフル

「そりゃ、作った本人だもの、当然でしょ。」 データを入力しながら  
みゆき

「シャイアンさんがまだメモリーの特性に慣れていないのも、原因の1つですが…。」  
かがみ

「そろそろ2人を止めに入る？時間もないし。」 SU準備中  
つかさ

「あ、お姉ちゃん待って！」  
かがみ

「どうしたの？」  
つかさ  
「もう決着が、ついたみたい。」

ガラハドサゴーズ

「はあ、はあ、もうアカンわ。」 体力が持たなくなったため、大の字になった

シャイアンプトティラ

「父上、無茶しすぎです。」  
かがみ

「言った事じゃない。」 悪い予感的中

いずみ

「…ところで、ベンドラはどうします?」

シャイアン

「完全に火の海だから…。」 変身解除した

シャツフル

「確かに、これは少しやりすぎたかも…。」

かがみ

「少しじゃないわ、かなりよ。」

シャツフル

「ああ、そつだな。ヤバい事にならなきゃいいけど。」

いずみ

「ヤバい事?」

ガラハド

「さあ、引き返すとするか!」 何故か冷や汗

全員が引き返した後、仮面ライダードラゴンナイト（以下DK）とウィングナイト（以下WK）がベンドラの異変を察知し、調査に現れました。

仮面ライダーWK

「ぱんだ、これはあ!？」 あまりの事態に混乱している

仮面ライダーDK

「べ、ベンドラが…どうすれバインダー!」 頭を抱えている



ボケ 9 オーズメモリー・フォーエバー くベンダラ、真っ赤に燃えてく（後

数日後、こなた達は究極空間に現れた仮面ライダーDK・WKに説教を受けていました。

こなた・かがみ・つかさ・みゆき・いずみ

「「「「ごめんなさい…。」」」」

仮面ライダーDK

「わかってくれればいいんだ、以後気をつけてね。」 意外と優しく対応

仮面ライダーWK

「それに作者、『ペンダラ』ではない、『ベンダラ』だからな。」

前回の予告参照

XX

「ああ、それについては以後気をつけるよ。」

その後、2人はガラハド・シャイアン・シャツフルにも嚴重注意して、ベンダラに帰って行きました。

次回予告

ガラハド

「今回は、少し趣向を変えるぞ。」

つかさ

「何だか嫌な予感…。」

かがみダークキバ

「絶滅タイムよ、ありがたく思いなさい。」

全員

「「全然ありがたくなああああい！」「」

こなたエターナル

「さあ、萌えのパーティーを楽しみなあ！」

ゆたかダークカブト

「お姉ちゃん、似合いすぎ！」

つかさりユウガ

「はあああっ！」

みゆきネガ電王

「ではいきます、つかささん！」

ボケ 10

【100回記念】激突！！ダークライダーカーニバル！！

はやと・勝舞ハンド

「「戦わなければ生き残れない!!」」

ボケ 10 【10回記念】激突！！ダークライダーカーニバル！！

シャイアン

「今回でスピンオフは10回目に突入したな、こなた。」

こなた

「うん、そうだね。」

ガラハド

「さて、そこで！」

かがみ

「一体何をやるの？」

ガラハド

「今回は少し趣向を変えるぞ。」

つかさ

「何だか、いやな予感……。」

ガラハド

「今の今まで触れなかった、ダークライダーによる試合をやりたいと思う！」

全員

「……ダークライダーで!?!?!」

みゆき

「でも、ダークライダーと言われましても、性能上私達に扱えるのかどうかわかりませんが。」

みさお

「そうだぜ。それにダークライダーって何やら怪しい機能があるらしいし、あまり関わりたくないぜ。」

ガラハド

「それについては大丈夫。今回私が用意したダークライダー用のギ

アやバックルには、怪しい機能や変身制限は外してあるから、安心して使ってくれ。」

こなた

「本当かなあ、何だか不安しか感じられないけど…。」

そんなこんなで、こなた達はガラハドが以前から開発してストックしたり、新規で開発していたダークライダー変身用のアイテムを借り受けました。

ガラハド

「では、みんながアイテムを手に入れたところで、試合を始めよう。第1試合は終 かがみVSパトリシア・マーティンだ。」

かがみ

「最初は、私からね。」

パティ

「ワタシも、マケラレナイネ！」

つかさ

「お姉ちゃん、何を選んだろう…?」

かがみ

「来なさい、キバット！」

キバット2世

『さあ、絶滅タイムだ。』

こなた

「キバット2世が来た、と言う事は…！」

キバット2世

『ガブリ!』 かがみの手にかみついた

かがみ

「変身!」

かがみダークキバ

「絶滅タイムよ、ありがたく思いなさい。」

全員

「「全然ありがたくなあああああい!」」「  
こなた

「しかも、何でダークキバ?」

かがみダークキバ

「ま、たまにはいいじゃない。」

つかさ

「でも、かつこいいね。」

みゆき

「とても似合いますよ。」

こなた

「うーん、悔しいけど似合ってる。」

キバット2世

『で、我々の相手は…。』

ピッ、ピッ、ピッ。 コード入力

『スタンバイ!』

パティ

「ヘンシン!」

『コンプリート!』

パティオーガ

「スタンバイ・オーケー!!」

こなた

「えええ、オーガなの?!」

ひより

「何故オーガアアア!?」

パーティオーガ

「イチドやってミタカツタンデース!」

ひより

「あれつて、555系最強クラスで、帝王のベルトの1つつスよ…」。

「 顔面蒼白

こなた

「かがみならともかく、パーティちゃんは大丈夫かなあ…。」いき  
なりの最強対決に心配している

キバツト2世

「まあ…こちらも最強クラスだ、いきなりやられたはないと思うが  
な。」

ガラハド

「試合、開始!」カーン! ゴングを鳴らした

パーティオーガ

「ダークキバのコウリヤクなら、カンタンデース!!」 すいかを  
投げた

キバツト2世

「す、すいか…。」 すいかに釘付け

かがみダークキバ

「え?」

キバツト2世

「すいかあああああ!!」 ダークキバから離脱

かがみダークキバ

「ちょwおまww戻ってきてよ、すいかに釣られないでえええええええ！！！」

パーティオーガ

「チャンストウライデース！！」 ミッションメモリーを装着

『エクシード・チャージ！！』

かがみダークキバ

「あゝ。」

パーティオーガ

「セイヤアアアアアア！！」 オーガストラッシュユ発動

かがみダークキバ

「覚えてなさい、あのバカコウモリイイイイイ！！！」

こなた

「あちゃー、かがみんがやられちゃったよ。」

シャイアン

「まさか、こんな結果になるうとは…。」

キバット2世

『あー、おいしかった』 すいか1個を皮ごと食べきった

キバット3世

『いや何も、親父の性格までコピーしなくても…。(汗)』

こなた

「それより、かがみは？」

かがみ

「…あのバカコウモリ、後でムッコロス。」 変身解除されている上、地面に大の字に埋まっているつかさ

「お姉ちゃああああん!!」

こなた

「かがみいいいいん!!」

ガラハド

「さて第2試合は、日下部 みさおVS田村 ひより!」

あやの

「みさちゃんは、何を選んだのかな?」

みさお

「変身!!」シャキーン!!

みさおオルタナティブ

「おつまたせー」

あやの

「えええっ!オ、: オルタナティブ!!?」

みさおオルタナティブ

「どうしたの、あやの?」

あやの

「みさちゃんの事だから、グレイブを使うとばかり…」

みさおオルタナティブ

「グレイブなら、あっち。」

ひより

「変身!!」 オリハルコンプレートを通過

ひよりグレイブ

「じゃーん」

ゆたか

「田村さん、かつこいいい！」

みなみ

「…がんばって。」

パティ

「レッツファイト!!」

ガラハド

「では、試合開始！」カーン!!

みさおオルタナティブ

「じゃ、いくぜ！」

『ソードベント!』 スラツシユダガーを召喚

ひよりグレイブ

「こちらも、いくツスよ！」 グレイブラウザーを構える

みさおオルタナティブ

「はあああああ!!」 スラツシユダガーを振り下ろす

ひよりグレイブ

「何のっ!!」 グレイブラウザーで受け止める

みさおオルタナティブ

「ウエイ!!」 再度振り回す

ひよりグレイブ

「ふおおっ!!」 左にかわしグレイブラウザーで薙ぐ

みさおオルタナティブ

「ウエ!!」 スラツシユダガーを盾にして防御

ひよりグレイブ

「ちいっ!!」 そのまま後退

こなた

「すごい斬り合いだ！」

つかさ

「でも、どちらにも負けてないよ、こなちゃん！」

みゆき

「展開が読めませんね…。」

- 15分経過 -

みさおオルタナティブ

「はあ、はあ、こ、このままでは埒が開かないぜ！」

ひよりグレイブ

「ならば一気に決着をつけるッスー！」

『ファイナル・ベントー！』サイコログを召喚、サイコロダ

ーに変形

『マイティー！』

こなた

「いよいよだね！」

あやの

「うん、そうだね。(みさちゃん…)」

みさおオルタナティブ

「ウエエエエエー！」 デッドエンド発動

ひよりグレイブ

「ウエエエエエー！」 そのまま斬り込む

ゴウウウウウ…ン！！

ゆたか

「相打ち！？田村さん！！」

みなみ

「…待つて、まだ決着はついていない。」

パティ

「リヨウシャがタチアガリマシタ！」

ひよりグレイブ

「まだまだあ！」

『キック！サンダー！マツハ！』      どこからラウズカードを取り出してラウズした

みさおオルタナティブ

「ちょw待てwwそれは反則だあああああ！！！」

『ライトニング・ソニック！！』

ひよりグレイブ

「ザヨゴオオオオオ！！！」

みさおオルタナティブ

「オンドウルルラギツタンデイスカアアアア！！！」

あやの

「みさちやああああん！！！」

こなた

「まさかのライトニング・ソニック…ひよりん、恐ろしい子…！！」  
つかさ

「切り札を使った時点で、勝負はついたはずなのに…。」

ゆたか

「田村さん、す〜す〜ぎる…。」

みさお

「あー、まさか自分自身の技にやられるなんて思わなかったよ。」

髪がアフロ

あやの

「みさちゃん、お疲れ様。（よかった、無事で）」

ガラハド

「さて、第3試合は泉 こなたVS小早川 ゆたかの親戚対決だ！」

こなた

「ゆーちゃんが相手か…。どの位成長したか、見せてもらおうよ！」

ゆたか

「お姉ちゃんも、どの位強くなったか見せてね！」

ゆたか

「来て、ダークカブトゼクター!!!」

ギューーン!!! ゆたかの元に飛来

ゆたか

「変身!!!」

『ヘンシン!!! チェンジ・ビートル!!!』

ゆたかダークカブト

「…何だか、みなみちゃんになった気分だね。ドキドキするよ。」

パピヨン

『しかしゆたか様、油断は禁物です。』 今回もゆたかと1体化し

ている

ゆたか

「うん、わかっているよパピヨンちゃん。」  
パピヨン

『ところで、こなた様は一体何でくるのでしょうか？』

『エターナル！』

こなた

「変身！！」

『エターナル！！』

こなたエターナル

「さあ、萌えのパーティーを楽しみなあ！！」

ゆたかダークカブト

「お姉ちゃん、似合いすぎ！！」

かがみ

「つてか、『地獄のパーティータイム』じゃないの？！」

こなたエターナル

「まあまあかがみん、細かい事はいいから。」

ガラハド

「さて、試合開始！」カーン！！

こなたエターナル

「さあいくよ！」エターナルエッジを構える

ゆたかダークカブト

「うん、負けないよ！」カブトクナイガン・クナイモードを構える

こなたエターナル

「ふおおっ！！」エターナルエッジを振り回す

ゆたかダークカブト

「はいっ！」それをかわし、カウンター気味にクナイガンを振り下ろす

こなたエターナル

「ならばこれで！」　さらにかわし、エターナルエッジで斬りつつ

ローキックを放つ

パピヨン

『くうっ！…ゆたか様、こちらもコンビネーションで攻めましょう  
！』

ゆたか

「そうだね、じゃあこれで！！」　右ストレートでフェイントをか  
け、左手に持たせたクナイガンで斬りつける

こなたエターナル

「うおっ、やるねー！」

ゆたか

「お姉ちゃんこそ！」

こなたエターナル

「ならば！」　スロットルにガイアメモリをセット

『ユニコーン・マキシマム・ドライブ！！』

こなたエターナル

「元祖ユニコーン・ライダー・パンチ！！」

全員

「『元祖！！？』」

かがみ

「…あ、そうか。」

つかさ

「？」

みゆき

「いつも平野さんが使っていたので忘れていましたが、元々は泉さ  
んの持ち物だったのですよ。」

つかさ

「そうだった、すっかり忘れてた〜！」  
かがみ

「つかさ、忘れちゃダメじゃない。ちゃんと覚えなきゃ。」  
つかさ

「はう〜。∴orz」へこんだ

みさお

「あ、でも元祖∴なんとかパンチは避けられたみたい。」

あやの

「それを言うなら、ユニコーン・ライダー・パンチだよ、みさちや  
ん。」

こなたエターナル

「くう〜、ゆうちゃんに避けられるなんて!∴ま、久々のロストド  
ライバーだから無理もないか。」

ゆたかダークカブト

（パピヨンちゃん、クロックアップを使ってみるね。）

パピヨン

（クロックアップですか∴、試してみる価値はありますね。使って  
みましょう。）

ゆたかダークカブト

（じゃ、やってみるよ!）

ゆたかダークカブト

「クロックアップ!」 起動スイッチを押した

こなたエターナル

「しまった!」

∴シーン。

ゆたかダークカブト

「あ、あれ？」

みなみ

「…どうしたの、ゆたか。」

ゆたかダークカブト

「クロックアップが動かないよ〜！」

みなみ

「動かない!？」

こなたエターナル

「ゆーちゃん、クロックアップ故障してるの!？」

ゆたかダークカブト

「どうも、そうみたい。」

ガラハド

「ああっ、しまった!」 何かを思い出した

シャイアン

「父上？」

ガラハド

「そうだった、ダークカブトゼクターはまだ修理中だったの忘れてたああああ!！」

全員

「「「いや、ちゃんと修理してから使おうよ!！」」「」」

こなたエターナル

「じゃ、これも…。」 スロットルにエターナル・メモリーをセット

シーン…。

こなたエターナル

「やっぱりウンともスンとも言わない…。」

ガラハド

「考えてみたら、エターナル・メモリーも修理中だった…。この試合は、引き分けの方向で…orz」

こなたエターナル・ゆたかダークカブト

（（ですよねー。））

こなた

「それにしても、何で修理中のアイテムを使わせるのかねえ。…おかげで不完全燃焼だよ。」

ゆたか

「でも、お姉ちゃんも強かったよ。」

こなた

「ありがと、ゆーちゃん。やっぱりゆーちゃんは優しいね。」 頭  
ナデナデ

ガラハド

「さあいよいよ試合も残り2つ！続いては峰岸 あやのVS岩崎

みなみ！」

みさお

「あやのは何で来るのかなあ？」

ゆたか

「みなみちゃんは何を使うのかな？」

みなみG - 4

「…お待ちませ。」

つかさ

「どうしてG - 4オオオオオ!!?」

みなみG - 4

「…これしかなかった。」

ゆたか

「でもみなみちゃん、かつこいいよ。」

みなみG - 4

「ありがとう、ゆたか。」 仮面の下で照れている

ピッ、ピッ、ピッ コード入力

『スタンバイ!』

あやの

「変身!」

『コンプリート!…!』

あやのサイガ

「私は、これでいくわ。」

ひより

「えええ、サイガを使うツスか!?!…サイガは扱いがすごく難しいツスよ?」 帝王のベルトの1つだから

みさお

「あやの、555系だからって無茶だけはしないでね。」

あやのサイガ

「心配しないで、みさちゃん。」

こなた

(みさきちも、心配性だねえ…。)

ガラハド

「では、試合開始!」カーン!!

みなみG - 4

「…いきます。」 ギガント、スタンバイ完了

あやのサイガ

「（あれにやられる訳にはいかないわ、すぐに回避しなきゃ。）…  
あ、あれ？スラスタの出力が上がらないわ。」 スピードが上がらない

こなた

「サイガのスピードが鈍いね、どうしたんだろう？」

みさお

「あ、本当だ。」

シャイアン

「父上、サイガの動きがおかしいが、一体…。」

ガラハド

「いかん、スラスタの機能が低下している！飛行用回路が断線しているんだ！！」

シャイアン

「何…だと？」

みなみG - 4

「もらいました。」 ギガント発射

あやのサイガ

「…はっ！！」 緊急回避

こなた

「やった、流石あやのさん！！」

みなみG - 4

「…ホーミング・モード、起動。」 音声入力

あやのサイガ

「？」

キイイイイイ…ン 背後から来た

あやのサイガ

「ヴゾナノドンドコドーン!!?」 背後から全弾命中

みさお

「あやのおおおおお!!?」

こなた

「あ、あやのさんオワタ。」

みさお

「あやのおおおおお…orz(泣)」

かがみ

「気を落とさないで日下部、峰岸はあっさりやられたりはしないわ

よ。」

みさお

「本当?」

かがみ

「ほら見て、峰岸が立ち上がったわよ。」

みさお

「あゝ、よかった。…って、あやのがこっちに来たよ?」

かがみ

「峰岸?」

あやのサイガ

「みさちゃん、キングラウザーを貸して。あと、ギルドラウズカー

ドも。」 大天使龍騎オーラ発動

みさお

「ウエ?いいけど。」 あやのにキングラウザー1式を貸した

『スピード10!ジャック!クイーン!キング!エース!』

あやのサイガ

「…これなら！」 背後に大天使ナイト・サバィヴ降臨  
『ロイヤルストレート…』

みなみG - 4

「では、私はこれで。」 烈火大斬刀を手にしている

あやのサイガ

「…え。」

みなみG - 4

「…そおいつ！！」 百火繚乱であやのサイガを攻撃

あやのサイガ

「オツペケテムツキイイイイ！！」

みさお

「あ、あやのおおおお！！？」

つかさ

「ゆ、ゆきちゃん、今の見た？」 ガクガクブルブル

みゆき

「ええ、あれは確かみなみちゃんの家代代々伝わる家宝の刀だと、  
聞いていますか…。」

こなた

「あれが家宝の刀あ！！？」

みゆき

「私も、鍛錬に使わせてもらった事がありますので…。」  
かがみ

（みゆき、その刀を鍛錬に使わないでよ…。てか、あれって別の世  
界の武器じゃあ…？）

キバット2世

『しかし大した腕前だな、あの少女は。…イテテテ』 かがみに握

り潰されている

こなた

「ちょwかがみw」

キバット3世

『親父モドキを握り潰すな、ミシミシいつてるしいiiiiiiii！』

あやの

「みさちやああああん…！（泣）」 みさおに泣きついた

みさお

「あやの、もう大丈夫だからね。」 頭ナデナデ

キバット3世

「…しかし、若いつていいものだな。俺なんか、そんな青春を送った覚えが全くないからな。」

あやの・みさお

「…えええ、本当に…!?」

キバット3世

「ああ、君達がつらやましいよ。」

ガラハド

「さあ今回のラスト、柊つかさVS高良みゆきの1戦だ…！」

こなた

「これでラストかあ…何だか寂しいね。」

パティ

「シカタアリマセンね、コナタ。」

ゆたか

「高良先輩、大丈夫かなあ。」

みなみ

「…どうして？」

ゆたか

「うん、先輩が選んだのが…。」 みゆきを指差す

みゆき

「変身!!！」

『ネガフォーム!』

みゆきネガ電王

「はああああ…はあっ!!！」

パピヨン

『何故ネガタロスの力を!?!』

ゆたか

「うん、だから心配してるの。ネガタロスさんならみだから、尚更

ね。」

みなみ

「でも、心配はない。あれはネガタロスを全く必要としないシステムを採用しているから。」

ゆたか

「へえー。…でも、ネガタロスさん抜きで大丈夫かな？」

みなみ

「それについては心配ない、と博士が言っていた。」

ゆたか

「…だといんだけど。」

こなた

「あ、それはそうとゆーちゃん、リュウガのデッキはどうしたの？」

こなた

「あ、それはそうとゆーちゃん、リュウガのデッキはどうしたの？」

ゆたか

「え？それならパピヨンちゃんに預けてあるよ。どうして？」  
こなた

「……。」 つかさを指差す

つかさりユウガ

「お待たせ。」

ゆたか

「な、何でつかさ先輩がリュウガに！！？」

パピヨン

『デッキはここにあるのに、どうして……。』

ガラハド

「ああ、あれね。あれは神崎と共同で作ったライダーメモリーを使  
っているんだ。」

みなみ

「ライダーメモリー、ですか。」

こなた

「けど、カードはどうするの？」

ガラハド

「それについては、大丈夫。スマートブレイン社にあった、デルタ・

ギアの音声認識システムを組み込んであるから、言うだけで能力が  
引き出せるんだ。」

かがみ

「じゃあ、能力使う度にいちいち言わなきゃならない訳？…面倒く  
さいわね。」

ガラハド

「では最終試合、開始！！」カーン！

つかさりユウガ

「はああああああ！！」 ドラグセイバーを呼び出した  
みゆきネガ電王

「ではいきます、つかさん！」 ネガデンガツシャー・ソードを  
構える

ガシィツ！バンツ！グワシャツ！

かがみ

「ねえ…つかさって、あんなにアグレッシブだったっけ？」  
シャツフル（遅れてやって来た）

「普段はドジばかり踏んでるから、トロいとばかり…。」  
シャイアン

「おそらくだが、あれが本来の彼女の動きだろう。力、技、速さ…  
どれを取ってもスキがない。」

こなた

「へー、つかさもやるねえ。」

- 20分経過 -

ゆたか

「みなみちゃん、すごい事になってきたね。」

みなみ

「2人共息が切れていない。動きもほぼ互角…。」

パティ

「アトハスペックのモンダイデショウ！」

ひより

「何だか悪い予か？」 あーっ！あの野郎！！まだくたばってなかつ  
たのか！！…え？」 何者かに憑依された

ゆたか

「…田村さん？」

「…ひより」

『ここで会ったが百年目だ、今度こそブツ飛ばしてやるぜ！』

ゆたか

「た、田村さん、どうしたの！？」

パピヨン

『ゆたか様、まさかとは思いますがモモタロスが田村様の体を借りているのでは…？』

ゆたか

「ええええええ！？」

モモタロスひより

『変身！！』

『ソード・フォーム！！』

ひより電王ソードフォーム（以下電王S）

『俺、参上！！』

Pゆたか（パピヨンにボタンタッチした）

『おやめなさい、あれにはネガタロスは憑依しておりません！』

ひより電王S

『うるせえ、あいつだけは何が何でもブツ飛ばさなきゃ、俺の気が収まらねえ！』 会場目指して走り出した

ゆたか

「…どうしよう。」

パピヨン

『仕方ありません、変身して追いかけましょう。』

ゆたか

「うん、そうだね。…変身！！」

『パピヨン・フォーム!!』

New電王P

『待ちなさい!!』

ひより電王S

『待ちやがれ、俺の偽物!!』

みゆきネガ電王

「!？」

つかさりユウガ

「…モモちゃん？」

ひより電王S

『覚悟しな偽物、今その場でムツコロス!!』 デンガツシャーン

ードで斬りかかってきた

みゆきネガ電王

「えっ!？わ、私ですか!!？」 応戦している

こなた

「あーっ、あのバカタロス!それは違うって!」つかさりユウガ

「やめてモモちゃん、ゆきちゃんから離れて!」しがみついて剥

がそうとしている

あやの

「モモちゃん、それは全く違うネガ電王よ!」

みさお

「ナニヤティンディスク、バカタロス!!」

ひより電王S

『バカ野郎、こいつあ俺にとっては嫌な奴なんだ、今仕留めないで  
いつ仕留めるんだ!!』

シャッフル

「アホタロス、これは違うんだ!いい加減離れやがれい!」 引き

剥がそうとバツクを取った

パティ

「モモ、ストップストロップ!!」 止めに入った

みなみ

「モモタロス、やめて!」

かがみ

「モモ、やめなさい!さもないと...!! (ブチッ)」 切れた

RUかがみ

「ムツコロス!!」 自然発火能力、発動

ひより電王S

「ぎゃあああああちちちち!!!」 ピンポイントで焼

かれた

ちなみに、止めに入ったみんなはRUかがみを見て退却しました。

New電王P

「遅かった様ですね...」

ゆたか

「うん...」

こなた

「結局、バカタロスが乱入したせいで試合は無効になりました。」

大天使ディケイド(激情態)オーラ発動

みゆき

「仕方ありませんね。」

つかさ

「でも、ゆきちゃんも知らないうちに強くなったね。」  
みゆき

「はい、鍛えてますから。(シユツ)」  
つかさ

「ところで、モモちゃんは？」  
こなた

「…あつち。」 向こうを指差す

ひより

「わ…私の体はボドボドダア…。」 丸焦げ寸前で助け出された  
パピヨン

『いい加減にしてほしいですね、モモタロス。』 朧固めをかけて  
いる

モモタロス

『ごめんなさああああい！！ゆ、ゆーちゃん、助けて！！』  
ゆたか

「モモちゃんのバカア！…もう知らない！！」 泣き出した  
モモタロス

『そ、そんなあ…。』

こなた・つかさ

( (当然だよなー。 ) )  
シヤツフル

(ま、天罰が下ったと考えよう。 )

ガラハド

「これにて、ダークライダーカーニバル、終了！！」



ボケ 10 【10回記念】激突！！ダークライダーカーニバル！！（後書き）

次回予告

ガラハド

「今回は、ライダーにならなくてもいいぞー。」  
つかさ

「え？」

かがみクラブキング

「はぁ？私がこれ！！？」シャイアン  
「重力を操るサイボーグ…だと？」

シャイアンゴセイナイト

「やはり騎士は、こうでなくてはな。」  
シャツフル黒騎士

「まあ、間違えてはいないがな。」

マーベラスフォーゼ

「お宝キター！！！」

海賊戦隊男性陣

「『ナニヤティンディスカ、マーベラス（サン）！！』」

ボケ 11

「何故だ！？レンジャーキーとこなた達とマベちゃん乱心」

八坂 こう

「これで決まりだ！！（ここしか出番がない…）」 今の時点では

こなた

「最近ゴージャイジャーが、メッサ人気を集めてるね。」

かがみ

「ま、確かにマーベラスもカッコいいし、他のみんなも個性があつて中々いいよね。」

つかさ

「それに、昔のスーパー戦隊の力を使えるのも魅力だよな、こなちやん。」

こなた

「うん、そうだよな。私だったらさしずめシンケンレッド、かな。」

かがみ

「…前回みなみちゃんが使っていた、アレの持ち主ね。」 前回参照  
つかさ

「私だったら、マジレッドかな？魔法使いって、魔法がいっぱい使えるでしょ。」

かがみ

「つかさって、本当に夢があつていいよね。私だったら間違いなくニンジャホワイト・鶴姫で決まりよ。体型が、すごくシャープだから。」

ガラハド

「おい、こなちゃん。」

こなた

「あ、博士だ。」

かがみ

「博士、今回は何のテストを？」

ガラハド

「今回はライダーにならなくてもいいぞ。」  
つかさ

「え？」

ガラハド

「今回は、レンジャーキーを使ったテストだ。」  
3人

「「「やったあああああ！！」「」」

みさお

「…それで私達も呼ばれたの力。何だかなア。」

ゆたか

「でも、ライダー以外に変身出来る機会って滅多にないから、かえってドキドキしちゃうね。」

こなた

「そうだね、ゆうちゃん。」 頭ナデナデ

ひより

「いや、それはいいツスよ。問題は…。」

八坂 こう

「ここが究極空間か…。」

永森 やまと

「どうやら、そうね。」

毒島 みく

「作者あああああ！どごじやあああああ！！」 このままギルスになりそうな勢い

山辺 たまき

「ぶっさん、落ち着いて！」 ぶっさんを羽交い締め

若瀬 いずみ

「全く…。」

ひより

「何で漫研部のみんなと委員長がいるんスか!!」

ガラハド

「ま…人数あわせ、だね。基本的に、戦隊モノは5人がオーソドックスだからな。」

シャイアン

「では、今回のゲストを紹介しよう。ゴークイジャーの皆さんだ。マーベラス

「よお、俺がキャプテン・マーベラスだ。よろしくな!」

ジョー

「俺が、ジョー・ギブケンだ。」

ハカセ

「そして僕がドン・ドッグイヤー。ハカセと呼んでね。」

レナ

「私がレナ・ミルフィだ。よろしくな。」

アイム

「アイム・ド・ファミーユです。皆さん、よろしくお願ひします。」

伊狩 鎧

「そして俺が6人目のゴークイジャー、伊…。」

こなた

「おおおおお!歩く萌え要素キターッ!」

アイム

「え…?あ、歩く…?」 何の事だかチンプンカンプン  
かがみ

「あ、アイムさん。別に気にしなくていいですから。」 こなたを  
押さえつけている

こなた

「か、かがみん、離せえー！」

鎧

「おいしいいいい！！俺の紹介がまだ終わってないって！！」

こなた達

「「誰？」「」 頭に？マークをつけながら

鎧

「…は？」

マーベラス

「鎧はお呼びじゃない、って言いたいそうだが、あのお嬢さん方は。」

鎧

「（ガーン！！）ナ、ナンダテー！？すみません、俺、泣いていいですか？…orz」

マーベラス

「鎧、冗談だからな。気にするな。」

ガラハド

「さて、今回の流れとしては、まず全員参加のレンジャーキー適応テストを行い、次にマーベラス達によるライダー適応テストを行う。」

マーベラス

「俺達が仮面ライダーに！！？」

ジヨー

「マーベラス、たまにはいいんじゃないか？最近ザンギヤツクの奴ら、なりを潜めているからな。」

ハカセ

「骨休めにはもってこいの企画だし、それに彼女達の実力も見たいし。」

マーベラス

「…そうだな。なら、ライダーの性能とやらを見るのも兼ねて付き合うか!!」

ガラハド

「さすがキャプテン、話が早い!」

ガラハド

「では、テストの内容を説明するぞ。…まずは、アイマスクと手袋を装着してレンジャーキーの入った宝箱の前に立つ。」

マーベラス

「そして、手袋を付けた方の手を伸ばしてくれ。レンジャーキーが個人に反応して、手元にくるはずだ。…後は、俺達が使っているモバイレーツにキーを差し、ひねるだけで適応した戦士にゴーカイチエンジ出来るぞ!」

こなた

「まずは、私達が最初ね。さあ、バッチコイ!シンケンレッド!

!」

かがみ

「こなたったら、張り切っちゃって。」

つかさ

「うーん、マジレッドは来てくれるかなあ?」

みゆき

「私も、少しドキドキしますね。」

あやの

「みさちゃんがないのは少し寂しいけれど、その分頑張らなきゃ。」

」

みさお

「あやのー、がんばって。」

こなた

「じゃ、いくよ。」

…ガシツ！ 手袋に手応えあり

かがみ

「…来た、ニンジャホワイト！」

つかさ

「あ、来た。」

みゆき

「私の方にも来ました。」

あやの

「私もよ。一体何が来たのかしら？」

こなた

「…では、せーの！！！」

5人

「…「ゴーカイチェンジ！！！！」」

『ボオオオオケンジャー！！』

『ジイイイヤツカー！！！！』

『デエエエカレンジャー！！！！』

『マアアアアジレンジャー！！！！』

『チエエエエンジマン！！！！』

こなたボウケンレッド

「…あれ？シンケンレッドじゃなくて？何で？」

シャイアン

「…多分、こなたの場合は宝探しと関係があるのでは…？」

こなたボウケンレッド

「宝探し、ねえ…。」

シャイアン

「こなたは、よくアニメショップに行つてグッズとかを買つて来たり、懸賞を出したりするだろう？宝探しと関係は大ありだ。」

ジョー

「それに、ボウケンジャーは冒険のエキスパートだからな。彼と世界を旅している事自体が、冒険そのものじゃないかな？」　こなたにウィンク

こなたボウケンレッド

「あ、そうか。（赤面）…で、かがみは？」

かがみクラブキング

「は？私がこれ！！？」　意外な結果にビックリ

シャイアン

「重力を操るサイボーグ…だと？」

みさお

「重力のかがみ、凶暴でんs「クラブ・メガトン！！」…えぼりゆうしょんっ?!」　かがみの一撃で吹き飛ばされた

かがみクラブキング

「ニンジャホワイトの夢が…夢が…orz」

つかさデカマスター

「で、何で私がこれ？」

こなたボウケンレッド

「つかさ、前にみんなを動物に例えた事、覚えてる？」  
つかさデカマスター

「あ、あの事？うん、知ってるよ。」 詳しくは原作2巻を参照  
こなた

「その時、つかさは犬に例えたじゃない。その影響だね。」  
ルカ

「そう言えば、あんた見た目が子犬みたいでかわいいし。」  
アトム

「笑顔も、すごく素敵でしたよ。」  
つかさデカマスター

「はう、あ、ありがとう。」

みゆきマジシャイン

「私がゴーカイチェンジしたのは、魔法使い系ですね。」  
アトム

「それはマジシャインと言って、『マジレンジャー』に登場する天  
空聖者の1人です。こなたさんから学力が高いと聞きましたので、  
おそらく...。」

ハカセ

「学力が高いのかあ、何だかあやかりたいなあ。」  
みゆきマジシャイン

「そうなのですか、ありがとうございます。」 アトムやハカセと  
気が合いそう

あやのチェンジドラゴン

「私がゴーカイチェンジしたのは、これね。...でも、何でこれ？」  
かがみクラブキング

「多分、峰岸が龍騎に変身する関係上じゃないの？ドラゴン繋がりで。」

あやのチェンジドラゴン

「だからドラゴンなのね…。」 少し納得

みさお

「次は私達か…。私はやはりスピードエース、かな。」 ブレイド  
に変身する関係上

こう

「うーん、私だったらハードボイルドにデカレットで決まり、だな。」

「

やまと

「私は、どれでもいいわ。変なものでなければ。」

みく

「私だったら、さしずめタイムファイヤーかな。」

たまき

「みくがタイムファイヤーなら、私はギンガマンのどれかだね。」

## 省略

みさお

「んじゃみんな、いくよー!…!」

5人

「「「「「ゴークイチェンジ!」」」」」

『バアアアアイオマン!…!』

『バアアアトルファイバー・J!!』

『オオオオオレンジジャー!!』

『メエエエエガレンジャー!!』

『ガアアアアオレンジジャー!!』

こうバトルジャパン

「…え？私はこれ？」

こなた

「でも何で？探偵繋がりでデカレンジャーじゃないの!？」

パティ

「ワカリマシタ！オソラクニホンのマンガのエイキヨウデスネ！」

こうバトルジャパン

「なるほど、漫研部の部長だから、か…。(ガクーン)」「うなだれてしまった

こなた

「確かに日本の漫画って海外じゃすごい人気があるから、ねえ。悪い事じゃないよ。」

こうバトルジャパン

「ああ、何てこったあ…orz」

やまとキングレンジャー

「私の場合は、大体わかる。」

こなた

「存在自体が謎、ってわけね。わかるわかる。」

みくメガレット

「宇宙キターー!!…って、何か違ああああう!!」 大絶叫

ひより

「でも、よく似合ってますよ、先輩。」

みくメガレット

「ありがとう、ひより。(泣)」

たまきガオブラック

「私の場合は…牛つながり、か。」 仮面ライダーゾルダだからひより

「何となく、わかりまッス。」

こなた

「で、問題は…。」

みさおグリーンツィー

「うええええええ!!!? 何でスピードエースじゃないの!!!?」

マーベラス

「ん? スピードエースなら、ここにあるぞ。…ひよっとしたら嫌われたかも、な。」 スピードエースのキーを手にしながら

みさおグリーンツィー

「尚更納得いくかあああああ!!!?」 大絶叫

かがみ

「本当、どうして?」

あやの

「う〜ん、何でかしら?」

こなた

「…あ、わかった。」

シャイアン

「理由がわかったのか?」

こなた

「うん。…みさきち、1度名乗りをやってみて。」

みさおグリーンツィー

「うえ?…あ、うん。」

みさおグリーンツ  
「グディーツー!!」

こなた

「これが理由だよ、みさきち。元祖オンドウル語の戦隊ヒーローって訳。」

全員

「「「ああー…。」」」

みさおグリーンツ

「もつと納得いくかあああああ!!…orz」

ゆたか

「次は、私達の番だね。」

みなみ

「…何が来るかは、私にもわからない。」

ひより

「ま、何でもいいッス。とにかく決めるッス。」

パティ

「ワタシにはナニガクルカ、ワカリマス!!」

いずみ

「やっぱり来てほしいのは、ターボレンジャーかな?同じ高校生だし。」

ゆたか

「来てくれるといいですね。」

中略

ゆたか

「では、いきますー!!」

5人

「『ゴーカイチェンジ!!』」

『ボオオオオケンジャー!!』

『『シイイイインケンジャー!!』』

『ジユユユウレンジャー!!』

『アアアアバレンジャー!!』

ゆたかズバーン

「…え?何これ?」

マーベラス

「そいつあ『ボウケンジャー』に登場した、大剣人と呼ばれる武器の1種だ。」

ゆたかズバーン

「えええ、武器ですか?これ!!ズンズン」

ルカ

(何気にズバーンの台詞まで移ってる…。)  
こなた

(ゆーちゃん、体力がないからレンジャーキーが気を利かせたのか

も…。」

みなみシンケンレッド

「そして私がこれ、ですか…。」

「うん、多分実家にある家宝繋がりだね。」 家宝が烈火大斬刀だから

ルカ

「よく似合ってるぞ。」

みなみシンケンレッド

「…ありがとう。(赤面)」

ひよりシンケンゴールド

「…で、私がこれッスか。寿司屋じゃなくて、同人書きなのに…」

orz」

ハカセ

「でもどうしてだろう？共通点なんて無さそうだし。」

ガラハド

「いや、そうでもないぞ。彼女が変身する555は、フォトン・ブラッドと呼ばれる光エネルギーを使った必殺技を持っている。…と  
言う事は？」

ハカセ

「あつ、わかった！だから、マスクに光の文字が入ったシンケンゴールドになれたんだ！」

ひよりシンケンゴールド

「そうだったんスカ…どうりで。出来れば剣繋がりでゴセイレッドになりたかったけど、今はこれで満足ッス…！」 気に入った

ジョー

(いや、むしろ光ならマスクマンの方が良かったのでは?)

パティティラノレンジャー

「イエー！ガンソパワーレンジャーにナレマシター！」

海賊戦隊全員

「『『パワーレンジャー？』』」

ガラハド

「…アメリカ版の戦隊ヒーローだよ。ま、リイマジ戦隊ヒーローと  
考えればいいかな？」

マーベラス

「アメリカ版、か…。で、1つ聞いていいか？」

ガラハド

「どうした？」

マーベラス

「その連中も俺達の仲間になれないか？」

ガラハド

「…まず無理だな。第一、キャプテンは英語が話せるか？」

マーベラス

「…無理。」

パティティラノレンジャー

「ナラ、ワタシがセツメイシマシヨウカ？」

ガラハド

「ああそうだな。パティちゃん、彼にパワーレンジャーについてレ  
クチャーしてやってくれないか？」

パティティラノレンジャー

「オーケー」

ただいま説明中、しばらくお待ちください。

マーベラス

「なるほどな。世界は広いぜ。」

アイム

「マーベラスさん、すごくいい笑顔ですね。何かあったのですか？」

マーベラス

「…ああ、ちよつとな。」

いずみアバレット

「…。」 怒りに震えている

ゆたかズバーン

「委員長？…ズンズン」

いずみアバレット

「何で私がこれなんじゃあああああ！！」 アバレモード突入

ゆたかズバーン

「みなみちゃん、止めて！ズンズン」

みなみゲキイエロー

「任せて…シンケンマル！」 いずみアバレットにヒット

いずみアバレット

「ぶらかわにっ！？」 吹き飛ばされた

シャッフル

「（仕事が片付いてやっと来た）しかし、何でアバレットなんだ？」

シャイアン

「多分、内にストレスをため込んだ結果だろう。何のストレスかは

聞かないが…。」

いずみアバレット

（コミケの時のストレスが原因だな、こりゃ…。） 原作7巻を参照

アイテム

「ところでマーベラスさん、鎧さんを見かけませんか？さっきからいなくて探しているのですが…。」

マーベラス

「あいつなら、そのうちひょっこりと帰ってくるだろ、心配するな。」

…さあ Continuing は、シャイアン達の番だな。」

シャイアン

「ああ、そうだな。」

シャツフル

「レンジャーキーか、ずいぶん変わったアイテムで変身するんだな。」

「モバイレーツを手にながら

ガラハド

「いよいよ私も変身するのか、一生ものだけにドキドキするねえ。」

中略

シャイアン

「では、いくぞ。」

3人

「『『『ゴーカイチェンジ!!』』』」

『ゴオオオオセイジャー!!』』

『ギイイイインガマン!!』』

『マアアアアジレンジャー!!』』

シャイアンゴセイナイト

「やはり騎士は、こうでなくてはな。」 家が騎士の家系

シャツフル黒騎士

「ま、間違えてはいないがな。」 家が黒騎士の家系

こなた

「何だかすごくかつこいいね。」

かがみ

「本当にそうね。特にシャイアンさんなんか、よく似合うわ。」

シャツフル黒騎士

「じゃあ、俺は？」 気にしてる

かがみ

「うーん、…どっちかな？微妙ね。」

シャツフル黒騎士

「ずいぶん酷い扱いだな、ヲイ!!」

ガラハドウルザードファイヤー（以下ガラハドUF）

「いや、まさか私も騎士になるなんて夢のようだ。」

ジヨー

「いや、意外だったな。」

アイム

「でも、よく似合ってますよ。」

ガラハドUF

「ああ、ありがとう…：博士生活25年、これほど嬉しい日はない！」

シャツフル黒騎士

「…おやっさん、それってど 性 エルのネタじゃあ…：。って言う

か、おやっさんの博士歴はそんなに長くないっての！」

ガラハド

「さて、キャプテン達の仮面ライダー適応テストが終わった訳で…。」

こなた

「い、いつの間に!」

かがみ

「早すぎるわよ!」

ガラハド

「ま、そこは少し端折らないとな…それで結果なんだが、意外な結果が出た。」

つかさ

「意外な結果?」

ガラハド

「ああ。まずは、これを見てくれ。」

みゆき

「こ、これは…。」

かがみ

「なんだこれは」

・マーベラス 555、響鬼

・ジョー 555、響鬼

・ルカ 555、響鬼

・八カセ 555、響鬼

・アイム 555、響鬼

ガラハド

「…この結果を見て、どう思う?」

こなた

「555と響鬼だけ…だと?」

ガラハド

「そう、それだけしか適応出来なかった。」

こなた

「他はどうしたの？キバだっていけるはずだよ？」

ガラハド

「いやそれが、キバの時は大変だったんだ。…ハカセ君なんかキバツトが魔皇力を注入した途端に、盛大に鼻血を吹いて気絶してしまっただ。」

ハカセ

「Oh、モーレッツ…。」 回復したが、少しダメージが残っているルカ

「ねえハカセ、大丈夫？」

ジョー

「こりゃダメだな、しばらく休んでろ。」

アイム

「かわいそうなハカセさん…。」

ジョー555の場合、ファイズエッジの威力が3倍になる。

ハカセ響鬼の場合、音撃棒・烈火の威力が3倍になり、烈火弾のスピードもクロック・アツプ並に速くなる。

シャッフル

「おやっさん、フォーゼドライバーを見なかった？」

ガラハド

「ん、どうした？」

シャッフル

「フォーゼドライバーが無いんだよ。確か、机の上に置いたはずなんだけど…。」

シャイアン

「そう言えば、アストロスイッチも数点無くなっているな。」

ジョー

「誰が持ち去ったか、大体わかった。」  
シヤツフル

「えっ？誰かわかるのか、本当に。」

ジョー

「ああ、何せ俺の勘は世界で2番目だからな。」 1番はマーベラス  
ハカセ

「…ジョーさん、一体年は幾つなんですか？」

ジョー

「ま、それはともかく、犯人は…アイツだ。」 向こうを指差す

マーベラスフォーゼ

「お宝キター！！」

海賊戦隊男性陣

「ナニヤティンディスカ、マーベラス（サン）！！」

ガラハド

「な、何てこった。まさか、キャプテンが犯人だなんて…。」  
こう

「あちゃ〜、私の勘も当たっちゃったよ！」

やまと

「私もね。」

みく

「何てこったあああああ！！」 体だけギルスになりかかっている  
たまき

「ぶっさん、待って！落ち着いて！！」

マーベラスフォーゼ

「早速スイッチテストをやるぜ！」

『ロ・ケツ・ト・オン!』

ガラハド

「ロケットを使うのか、でも場所が悪すぎるぞ。」

ひより

「何となく、オチがわかってきた…。」 いやな予感

ゆたか

「あ、それなら私も…。」 上に同じく

マーベラスフォーゼ

「宇宙、キタアアアアア!」 ロケットモジュールの出力を全開にして飛び上がった

こなた達

「「「キヤアアアアア!」」」 スカートを必死で押さえているが、少し見えている

シャイアン

「「 中身を見てしまい、気絶

シャツフル

「見なかった、今のは見なかった…。」 見てしまったが、後が怖くて震えている

ガラハド

「キャプテン、はしやぎすぎだな。」 平常運行

マーベラスフォーゼ

「いやっほオオオオオ!」 ノリノリ

ジヨ

「おいマーベラス、降りてこーい!」

ハカセ

「だめだこりゃ、全然話を聞いてない!」

マーベラスフォーゼ

「（10分飛んでやっと降りてきた）さあ、次のスイッチだ！」  
右腕側のスイッチ交換

『ファイヤー！』

『ファ・イ・ヤー・オン！！』

マーベラスフォーゼファイヤーステイト（以下マーベラスFFS）

「おっ、赤くなった。…どんな効果があるか、楽しみだ！」 スイ

ッチにハマった

ジョー

「だ、だめだ。マーベラスの奴すっかり乱心している！」

ガラハド

「それにあのスイッチは、まだ試作段階の未完成品なんだ、あれを  
使われたら体が持たなくなるぞ！」

RUかがみ

「…私に任せて。」 スカートの中身を見られてキレた

海賊戦隊男性陣

「何これ！番怖いのキター！！」

ルカ

「かがみ、精神ダメージは大丈夫かい？」

RUかがみ

「大丈夫、もう平気。…それよりも、あのバカ船長を焼き尽くすわ  
よ！」

マーベラスFFS

「誰がバカ船長だ！こうなったら、力を見せてやる！」 両足のス  
イッチ交換

『ランチャー!』

『ガトリング!』

『ラ・ン・チャー・オン!!!』

『ガ・ト・リ・ン・グ・オン!!!』

『レー・ダー・オン!!!』

マーベラスFFS

「どうだ、これがフル装備FSだ!」

RUかがみ

「甘い!」 自然発火能力、発動

ガラハド

「待てかがみちゃん、うかつに発火能力を使うな!そいつには火炎吸収能力があるんだ!」

RUかがみ

「えっ、嘘!」

マーベラスFFS

「おっ、こいつあスゲエな!...よし、いくぜ!倍返しだ!」  
火炎吸収後レバーオン

『ファ・イ・ヤー、ラ・ン・チャー、ガ・ト・リ・ン・グ、レー・  
ダー、...リミット・ブレイク!!!』

マーベラスFFS

「くられ、ライダー乱れ撃ちカーニバル!!!」 目が血走っている

ガロガロガロ!!! 乱れ撃ち開始、

全員

「「「わあああああ、もうダメだ!」」」



海賊戦隊全員

「……は?」「」

鎧

「お前等はいいよなア…そこにいる娘達をゴークイチェンジさせて楽しんでるし、みんな揃って仮面ライダーになつたり…。どうせ俺なんか…。」

マーベラス

「おい鎧、やさぐれるのもいい加減にしろ!早くこっちに来い、お前が終わらなきゃ帰れないんだ!」

鎧

「汚してやる、太陽を!…変身!」

『ヘンシン!…チェンジ、キックホッパー!』

こなた達

「…ええええええ!!キックホッパー!!?」「」

シャイアン

「あれは一体…?」

こなた

「あれはキックホッパー、『カプトの世界』のライダーで、地獄兄弟の兄貴こと矢車が変身するライダーなんだよ!」

マーベラス

「何っ、地獄兄弟!?…あいつ、その地獄兄弟とやらになつてしまつたのか?!」

シャイアン

「まさかな…。マーベラス、彼がああなつた事に何か心当たりはあるのか?」

マーベラス

「すまん、俺のせいだ…。俺が何とかする!」

鎧キツクホツパー

「…。」  
ブチギレ寸前  
マーベラス

「鎧、あれは冗談だと言ったはずだぞ、何でそれを真に受ける!?!」  
鎧キツクホツパー

「話は聞かん!?!…くたばれ、バカ船長!?!」  
ブチギレた

『ライダージャンプ!?!…ライダーキック!?!』  
トドメ

鎧キツクホツパー

「笑ええええええ!?!」

マーベラス

「ぐわあああああ!?!」

ジョー

「いろいろ世話になったな。」

ハカセ

「また落ち着きましたら遊びに来ますね。」

アイム

「それまで、ごきげんよう。」

鎧

「…光を求めるな!」  
しつこい

みゆき

「では、またお会いしましょう。」

つかさ

「それまでお元気です。」

ルカ

「それにしても…。」

マーベラス

「」返事がない。只の屍の様だ

この後、機嫌が直った鎧に適応テストを実施しましたが、キックホッパー（orパンチホッパー）しか適応しませんでした。

ちなみに、鎧キックホッパーは矢車版よりも全体的に+5t強化されている。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4178r/>

---

仮面ライダーアナザーディケイド・スピンオフ！！

2011年12月4日08時45分発行